

特54
376



4
3

特54

376

往古より武術を以て全國を廻歴し勇名は今も昭々たる者又樹りら
 ず就中宮本武藏荒木吉村此如きに至ては講談家の能く之を演じ劇
 場み於ても又脚色興行するが故に普く人口に膾炙する處なり然
 るも本編の各士は本左門之助が履歴み於る奇話診證の多しと雖も
 武藏と姓を同し而も世を稍相似たるを以て事跡大ひに混淆し其是
 非を別たす難し一話爲と者あるも多くの浮妄の説を止るなり
 茲に於て余の此編を著すや豈又妄談性説ならず左門之助が生立よ
 り武藏の心を寄る間を無き親と叔父との仇敵討んと廻る國々此艱
 難辛苦を眞事進行皆悉く蒐集して一部の冊子と做したれ共淺學
 不才の拙解なれば岸の柳も梅か香を添たる様な文飾もせず眞面目
 な理由を述る而已

明治十七年孟春

岡田霞船識



金梅鉢 宮本左門之助武勇傳目録

- 第一回 綾部藤一郎武術と練磨す
- 第二回 八重梅名士と慕て赤繩と結ぶ
- 第三回 宮本勘解由津和野に仕官す
- 第四回 源藏凶悪と逞ふして宮本と殺す
- 第五回 左門之助足代山に衆人と血戦す
- 第六回 宮本悪狐と退治て童子と憐む
- 第七回 小松翁宮本に秘術と授て後難と示す
- 第八回 宮本天守に上りて不圖官女に見ゆ
- 第九回 靈夢に感じて黒島左膳宮本と救ふ
- 第十回 宮本龜戸村に婦女の危難と救ふ
- 第十一回 獵夫宮本に會して敵の居所と告
- 第十二回 豪商力士暗日野峠に賊難に逢ふ
- 第十三回 宮本冤罪と受て獄舎に繋る
- 第十四回 義壯土獄舎に忍で宮本と諭と
- 第十五回 力士豪商と謀りて宮本の冤罪と訴ふ
- 第十六回 彦尾の深智黒白邪正と裁断す
- 第十七回 彦尾の邸ふ夫婦兄弟奇譚に及ぶ

目録

宮本左門之助武勇傳

第一回

綾部藤一郎武術を練磨す
宮本衛守深夜に横死す

天下乱れて豪傑の現れ國治りて英雄隠ると雖も又泰平の世萬人に優れ千載の今日に至り其名昭々たる者豈少しとせず开も本傳の名士宮本左門之助の履歴に於ける豐太閣隨一の忠臣加藤肥後守備正の郎等左衛門國の舍弟に片倉玄蕃と云ふ者あり兄と諸共又忠義を盡したりしが清正公卒去の後嫡子忠實に仕へし其子光政の代に至りて家断絶す此時玄蕃は年八十に及びたれ共身壯健士に優り且忠義なるが世の盛衰を物憂思ひ嫡子藤五郎廣忠次男庄五郎忠時と俱に肥後の國王名の里の片倉に引籠り忠臣二君に仕へずと誓ひ親子農業を以て世を安樂に過せしが長男藤五郎に一男一女あり然るに同國八代に住す綾部勘解由と云ふは藤五郎が妻の兄にして是又大丈夫の者なり不幸にして嗣子の有ねは只管請ふて藤五郎の一子藤一郎未だ三才の時に貧ひ受胎子も母は病に罹りて是を愛を盡し成長爲すを娛み居しか藤一郎の稍人心を覺へし頃より好んで劍戟を學び他國に心を移さず居る者から勘解由は猶更大に悦び此子成人の上からは必ず天下に英名を馳し天晴一騎當千の士共成らんと夫婦の者心嬉敷云がまに其意に任せ置たりしが光陰矢の如き管に洩す何時か十五才と相成ければ養父勘解由は藤一郎に打向ひ汝が幼き時より武術耳に心を碎き片時も怠りの色を見せぬは感ずるに尙餘りあり然れど凡そ士たる者は文武兩道に優れば天下の英雄とは云難し汝も美名を擧度思はば傍ら文道に心を寄せよ七左も無き時は和漢の事蹟に聞き耳か匹夫の勇を憑として竟に己身をも過またん其上ならず第一

宮本衛守深夜に横死す

田丸將監劔に敵の手掛りと告る

鈴木源藏再度勘解由と恨む

左門之助久留米に武勇と顯す

妖狐少女と化して名士と誑を

高波村の農夫赤心と商賈と

獵夫大作雪中み左門之助と救ふ

靈刺紛失して宮本冤罪と受る

姫路の天守に宮本老狐と退治と

宮本旅泊に山邊大之進と戒む

宮本岩開山中に山賊と殺と

左門之助強賊と討て衆人と助る

宿吏私慾に眩して宮本と亡んと謀る

管神の靈現宮本の嫌疑と解しむ

名吏訴へと容て名士と救んと決す

宮本時運と得て不圖復讐に及ぶ

宮本八重梅と扱て塚原左源太と腹刺

八に國を治る基礎とも知らずして人の上座に在る事は難し能々分別せぬ時は生涯の身をも過つべしと父が詞に藤一郎は始めて夢の覺たる如く養父の前に兩手を着噫有難き御意なる哉私し是迄武藝を好み文道に心を寄すして空敬光陰を送り後年人の物笑共成べきを疾くも父君の御厚志に依り開夜よ月を得たるが如く就ては之より何人に従ひて教を受んが宜敷御指擲下され度と心に現れければ勘解由は殊に打悦ひ然らば汝ちに申聞なん我兄宮本衛守と云は好で和漢の書籍に眼を晒し博學多識の者なれば其方が師と仰く共決して不足の無き程に能々教を受よ迎夫より翌後杆築に在る宮本の方に書状を出し藤一郎の身の上を頼み度旨申遣はしければ異儀無き返書が來りしに藤一郎は養父の家を離れて宮本衛守の元に至り晝夜を分たす勉學するや一を聞ては十を知るの才學あれば僅か三年の間にして頗る其理を解天晴和漢の典廢を論ずる學識を有しければ衛守は勘解由の元に申送りけるや最早文學は充分ならずと雖も平常の學士と比較れば杯か一步を譲るべき是に依て此後は再度武道を熟達せしめんと欲するなり今泰平の世と雖も未だ諸國に大坂方の浪士の子孫が残り居て平穩ならぬ事耳われは唯文弱は流んより文武を兼たる上からは何れに仕官致す共指擲する身分に成べ必定必す察し給ふなど平常の行ひより學術の進歩に至る迄詳細申送りしに綾部夫婦の悦びは大方ならず尙此上は幾重にも宜敷御教授下され度と厚く謝禮の書状を出し藤一郎が立身の時をば娛み居たりける此時寛永二十年の春にして年已に十六才に相成ければ衛守は藤一郎に打向最早其方等も當春に前髪を取男一人と相成べし就ては某しが祖先なる左門正國と稱せし人は文武に秀てし人なる耳か義氣金鉄の武士にて戰場へ臨む毎に大功を現し竟に一度の後れを取らず生涯の中自ら致に中事八十五度に及びし程の者なるが曾て騎奢に耽らす聊か私慾も志しを變せず老年に及んで山間に身を退き花月を以て娛みと

爲し世を安樂に暮すを以て其頃誰か云ふ共無く仙人と迄言れたりしと今汝ぢも祖先の氣象に似たるを以て今日より雷門之助正光と名乗べし又武術の師と仰く可き者は田丸將監と稱し諸流に涉りし達人ありて容易人と面會せず今山間に身を退きて在すれど幸ひ我等の別懇なれば其方か身上を依頼爲す可しと物語夫より衛守は左門之助を同道し初對面の禮終り具に履歷を明し只管請ふて羽道の指南を頼みてより田丸の家に寄宿爲しめ又其趣を肥後の八代なる綾部勘解由の元へ改名及び再度武藝に若たるの始終を詳細申送りければ綾部は兄の厚恩を謝し尙ほ此上にも左門之助が武術を熟達致せし上疾く歸宅を爲しめ度と其期を待て居たりける諸宮本は或夜の事酒宴の席に招れて思はぬ外に酩酊し暇を告て立歸る其山路も縁てより案内知たる處ゆへ手に提灯を携へて餘念も無くして歸り路は四邊寂莫として昔も無く物に襲はれ遠吠の犬の聲さへ最稀よ早深々と更渡り斯る折には誰にても語ら友や早影に光る川瀬も物凄き和田川へりを過んとす折柄一個の曲者が現れ出て聲をも掛す肩先深く斬付たり衛守は深手を受ながら刀を抜て立向へと最初の手疵に太刀先乱れ竟に其場へ斬伏らる又曲者は仕合よしと宮本が帶たる脇差を奪ひ取何國へなりか逃走りぬ其翌日に相成と昨夜云々斯々と田丸の元へ報知の來しに將監は固り左門之助の驚歎大方ならず直線綾部勘解由の元へ急飛脚にて申遣はし又泣居る衛守の姿をば勵野邊の送りと濟せしが濟ぬは横死の事にして如何なる恨を受たるより又何者の手も懸り斯る御最期ありしかと敵の様子を探りける且又勘解由は杵築より急使の來りて兄宮せが殺害されしと聞よりも夜を日に繼到着せしが最早野邊の送りさへ濟し後にて有ければ悲歎の中にも田丸と侶俱敵の手藝を素めける然るに衛守は一子も無く妻迎病身の者なるが良人の最期を朝暮歎き涙の乾く暇さへ泣より外に有ざれば勘解由は大ひに心を痛め一人にては差置難しと夫より八代の住

十居と引拂ひ豊後軒築に移りしは正保二年の四月にして左門之助十八才なり然共衛守の妻なる者は日々悲歎の愈増て心も狂ひ氣も乱れ絶へて入る可き休なるに勘解由夫婦は諫め慰め今にも敵の手掛りあらば物の美事に討取て冥途に在す兄君の御鬱憤をば散せん程に必ず御心を痛め給ふな數ならぬ共某しが度急敵を探し出し杯此儘に生置べきと兄嫁久美の心を慰め之より後は晝夜と無く仇たる者の手係りに心を盡して有けるが此勘解由は衛守の實の弟にして綾部と姓を改しは祖先たる者が綾部村に住し之より志しを得たると云ふ故事に據りて斯は名乗し者なるが今實兄の横死を遂たるより茲に復姓して宮左勘解由と相改左門之助も又宮本と改姓す却説是より先左門之助は叔父の最期を遂てより一個熱以爲我こそ文武の道をも心得是迄上達なしたるも皆叔父君の鴻恩なり斯る恩人なる耳か正しく叔父の御最期を他所に見傲して居らるべき假令敵は何者と其手係りは無きにもせよ和漢共に往古より艱難辛苦を累し未遂には仇を討得し事今も青史に昭々たり我等不肖の身なり共敵を討で置べきと拳を握め切を爲し一個心に誓ひを立或日勘解由の前に出私し事も叔父君より受し御恩は山より高く海より深き者なるに其御恩さへ報はぬ内今回の御最期有しに付其仇たるは何者なるか更に之ぞと思ふ可き怪む人の非ず其天知る地知るの誓もあり争か知らずに居る可きや何卒父上私しへ復讐の儀御許し給はれ此より諸國を經廻て必ず敵を探し出し物の美事に討取て黄泉に在す叔父上の御鬱憤をば晴し度此儀を平にお免しあれと思ひ込たる詞を聞勘解由は確と恨手を拍實に天晴なる汝ちが一言如何にも直様此場に於て差許し度と思へ共汝ちも未だ若年にて世上の事に疎かる耳か且又血氣に疾るを以て敵の在所を見認もせば又輕卒の舉動から不覺を取やも圖られや假令今日より發足爲す共敵の在所を忽ちに探し出す譯にも非ず又某しも此程から竊に工夫を施して敵と眼ふは誰なるか心を碎

いて在る故に今暫時の其間迄通り武術を練磨し田丸の先生の許に在り時の至るを相待べし然る時には仇人も自然と心に弛みを生じ又手係りを得るやも知らずと父の詞は左門之助は實に最もと思ふ者から然らば父の仰に隨ひ尙此上にも武術を勵み時節の來るを待申さんと夫より再度田丸の家に歸り父の所存を述も爲つ又其身にも武道に長し敵を討ん心願なれば何卒以前に尙優り御教授の儀を願はしと思ひ込たる形勢に田丸は愈々其意を感じ如何にも今回の珍事に付ては無かし父御もお歎き成る可し某し迎も衛守殿とは從來兄弟の如く相交り信義を俱に盡したりしか最早還らぬ鬼籍に入れ會見する事も成らざるは此將監が身に取て長歎息の外非ず夫に付ても貴殿の精神實に天晴の御大望必ず本懐を達せらる可し某し事は年已に耳順を過し上からは血氣壯の其元と豈能事を爲し得んや左は去ながら某しも俱に其場へ立臨み仇たる者へ一太刀恨み宮本氏の亡魂を慰め度とは存るなり况んや貴君に於てをや其精神の天地に通じ必ず敵の者も知れ愛度望を果さるべし先夫迄は身を慎み此術の外に必ずしも心を動し給ふなと田丸の詞に左門之助は愈々心を堅固に持武術を勵む外よりは脇眼も觸らず一心に他事無く修行を致しける

第二一回

八野梅名士を慕て赤繩を結ぶ
田丸將監竊に敵の手掛りを告る

一十
歸來れば早咲初る梅ヶ枝を何時か暮ふて鶯の初音を告る庭の面空さへいと朝に四方の氣色一入と左門之助は我居室の窓を開いて餘念なく打臥てぞ有にける此時田丸將監の娘八重梅は歸も二八の春をば迎へ綻び掛る室の梅馨り床敷風情にて當時所の若者は皆見ぬ戀に焦れつ道ては一眠姿にも見聞ほし杯と呷きて其噂さへ高かりしが田丸は秘藏の娘故容易門へも出さぬが此八重梅は左門之助が武術修行の其爲に我家へ來り初めしより浸然に心の勵き初一個胸をば焦

せし者の未だ初戀の取敷斯る事をは言出て若しや願ひの協はねば又其時は何とせん事との事よ
 諦めて止なん者と思へ共娘心の一筋に想ひ詰たる心から忘んとして忘らぬ去迎父母の側に耳
 事へて居れば是迄も言寄る術も落漕ぐ海士の小舟の楫絶へて浪に漂ふ如くなる心も茲に非ずし
 て折に觸ては父母の間近く居らぬ隙を見て左門之助が一室の内へ忍び生んと爲るなれ共若し父
 母の我身をばお呼ありしもせられては此身の上は兎も角も宮本備に相濟ず何時か一日宜間も有
 ば窮に魚る胸の裡明して見んと明暮に心を込て居たりしは時も睦月の末の方父の將監は近邊な
 る鎮守の社に詣んと朝早くより起出て深山の方に趣きしが母の松尾と呼ぶ者も何やら用事の有
 しと見へいそ／＼表へ立出しが後に残りし八重梅は今日ぞ日頃の胸の裡通せん者と立出て左門
 之助が餘念無く庭の面を詠め居る後の方より忍び寄未だ詞さへ掛ぬ内左門之助は振返り離君と
 思へば八重梅どの如何なる御用で我居室にお忍び有しぞ今日御双親様共お留守の様子我等に
 御用の在すなら疾々仰せ聞られて御引取を願ひ度若し此場を父上にも御覽せられし其時は貴
 女は勿論某しも不義者なりと御疑念掛り如何なるお咎有やも知ず別段御用の在さずはお還りあ
 れと強面も云放されて八重梅は何と詞も非ずして左門の膝に取籠り差俯いて漸々と妾の口から
 今更に申上るもお恥しけれと貴君が我家へお出しより想ひ初しが今日迄も焦るゝ耳にてお咄し
 るへ後りと出来ぬは何事と明暮嘆ち在たりしも今日は傍倅お双親も御他出ありし其隙と忍び参
 りし者たるを論うと云ばお情ない妾の願ひ適はずや最早此世に望を無しお留め有なと身を起し
 馳出る様に棄置れず左門之助は八重梅の袂を捕へ引戻し开は御短慮なり我須臾此一言をお聞か
 れ某し迎も岩木ならぬは慕ふて下さるお志し豈強面を好申さん左は去ながら小生も身不肖なれ
 共武術を勵み天下に武名を擧度志願且其外に大望おれば唯今返事の相成べき又實君迎當家の

御息女我等如きと浮名の立ば生涯お身を過つべし其上ならず親御様迄我子の愛に溺し故教訓の
 届ぬ處から不義密通をせし杯と人の口齒掛ては此上も無不孝ならずや某し迎も左の如く愛の道
 理を汲分強面者と思さず思ひ詰給はるべし左も無き時は某しの退身致迄の事篤と御配慮下さ
 れよと其理を詰て論にぞ斯言れては八重梅も再度返す詞なく差俯黙然たり此時田丸將監は襖を
 開いて出来り左門之助に打向ひ天晴見上た貴殿精神實は娘に申付御心底をい試ん爲め斯も無禮
 を致せたり是皆拙者の罪なれば平に御免ある可しと思ひも寄らぬ田丸の詞呆るゝ迄に驚きしが
 將監は尙進み寄り此御無禮を謝せんが爲め今日拙者が秘術とする一刀流の奥儀を皆傳すべしと
 宮本を奥の一室に伴刀法の極意は申すに及ばず柔術鎧術に至る迄傳授しければ宮本の歡び
 大方ならず其翌日に相成と田丸夫婦の左門之助が居室に徐々入來り詞改め述やう我等夫婦の打
 頼ひ罷り出しは餘の儀に御座無く實は昨日八重梅か貴君を慕ふて不圖失禮就ては拙者が其場に
 立出御心底を試みん爲めと申出しは是全く娘の立場を失ひて當惑爲し体なるを襖越にて我等の
 立朝夫故突然罷出斯のあ咄し申せし者なり重ね／＼の虚言なれ共何卒御宥恕下され度と聞て
 々驚きしが此時將監夫婦の者は詞を揃へて言るやう實は娘の其元をお慕ひ申す様子は知れど
 一行中なる大事の御身夫故申上ざりしが思ひ掛無き昨日の仕儀然るに見上た御心底拜見致し
 て願ひあり何卒女八重梅を妻に娶て給はらば我々夫婦は申すに及ばず娘に於ても満足す可し此
 儀御承知下さらずやと思ひも寄ぬ詞を聞左門之助は頭を下遣は有難き御慮なれ共御承知あ
 る如く身は大望を懐きし某し且又不肖の身を以て先生の御息女を戴かれんや夫のみならず若輩
 の小生此儀は御免を蒙り度と辭するを田丸は押し止め其御辭退は御尤我等に於ても豫てより御志
 願あるの如何にも承知故に唯今進らする我所存にては決して御座無く假令幾歳を越る共御本懐

を遂たる后妻に娶て給はり候へ已に御尊父勘解由殿にも先頃拜謁致せし砌り鳥渡お咄し申せし
 處直様御承知ありたれ共竟今日迄打過置しが昨日娘の事よりして宜折なりと相心得不圖お咄し
 申るなりと他事無き將監の詞に、然らば御意に随はんと左門之助が承知の由は田丸夫婦に八
 重梅の悦び況ん方も無し此時將監は懷中より小柄一つを取出し此なる品の其元には御承知ある
 やと差出され何心なく取上見れば赤銅七子へ毛鑄にて狂ひ獅も凡作ならぬば尙熟々と詠て居し
 か道は是前に我叔父の帯して居られし脇差に附たる小柄に相違御座無く討れ給し其時に脇差の
 柄は紛失したるか如何致して御手に入しと疾々仰せ聞られよと進み寄るに將監は何を隠さん
 實は昨日鎮守の社に参詣し又神官とは入懇の儘に居室へ通て在りし時何れの士なるか其場に來
 り取出せしは此なる小柄當時不用の者なれば三両金にて購ひ吳よと只管頼み居られ共神官の者
 に不用の由候侍我等も其場にて一見致せば豈圖らん某し迎も衛守殿が平常帶し脇差の小柄と見
 受ありたるは其奴が望みに隨ひて金三兩を以て相求め夫より刀劍の咄しに事寄せ出所を詳細尋
 ねし處元持主と申するは當時石州津和野に到り龜井侯の家臣となり鈴木何某と名乗由其奴も直
 に買受し品に有れば詳細は存知居らざる櫛子なりしが強て尋る其時は又疑はれんと想ひし故何
 氣無くして立戻れりと始終を聞て左門之助が其悦びは大方ならず敵の手孫りを得たりしも是皆
 兎生の御厚恩必ず忘却仕らずと雀踊爲て歡ひける

第三回

宮本勘解由津和野に仕官す
 鈴木源藏再度勘解由を恨む

勤て田丸將監は宮本勘解由の元へも報知仇たる者を探察せんと書を認めて居る況しも不圖勘解
 由の尋ねて來しに田丸夫婦は馳出し時侯の挨拶も詞短かに濟せし衛守が所持せし小柄をば手

に入たる始末を語り且又娘八重梅を左門之助が妻と定めし事迄も落無く茲に物語れば勘解由の
 悦喜一方ならず夫より左門之助をも招き酒宴を設けて饗應し娘を以て酌をば取せ其酬に及ぶ頃
 勘解由は將監に打向ひ今日我等の罷り出しは其元様共御協議申然る上にて兎も身も答へを致し
 置たる儀は小生武藝は未熟ながらも津和野藩にて召抱へんと再三申込れしか未だ確答致さぬよ
 今回は是非にと達ての懇望固り仕官を好まぬ共愚息左門か身の爲と夫是勘考致る時は謝絶爲す
 にも及ばずと未だ決心仕らず且又衛守の妻の實家は津和野藩士に之あれば旁縁の無きにも非
 ず併し貴君の御所存を相伺ひし其上と此儀御商議仕る御腹藏なく其可否を具さに仰せ聞られよ
 と勘解由の詞に將監は思はず膝を確と拍开ば又如何にも恐説なり何ぞ異存の御座る可き願に御
 仕官然るべし幸ひなる哉只今もお話し申せし小柄の儀も元持主と申る者は石州津和野藩士にて
 鈴木何某と名乗由若しも其奴か衛守殿を打果したる所爲なるか旁以て長場合此機を失ひ給ふな
 ど田丸か詞に宮本も心を決して竟に津和野に仕官をなせしは正保三年の八月なりしか藩主は勘
 解由一子あり武藝に達せし趣を何時か聞し召れし故父子諸共に仕へよと屢命を蒙るにぞ今
 は是非なくして此旨を豊後の田丸將監の元へ具さに申贈りしにぞ將監も又大ひに悦び直様左門
 之助を呼招き書狀を示して申すやう御尊父よりの御書面にて藩主の頼りに其元を召るゝ趣さに
 是あれば津和野藩士と相成られ武名を天下に攀給へ且又武術も熟達爲ぬれば如何なる者に出逢
 共後れを取るゝ氣違無し善は急の譬へあり翌日は出立せられよと萬端世話を致すにぞ宮本は深
 く之を謝し其身も準備を爲したりける夫に引替八重梅は石州津和野へ左門之助が赴く由を聞よ
 りも一個心に歡ばず日頃慕ひし甲斐ありて焦れし君へは双親のお許ありて表向夫婦と成らるゝ
 嬉しさを待つ甲斐も無く津和野とやらへ引移られては此後に如何かお顔を見らるゝ事か去り迎

妾を諸共にお後を慕ふて行事ならず如何はせんと娘氣の居室にて戀在にける折柄母の聲として
 呼立られて八重梅は唄と返答も口を閉して立出れば父母は何時か酒宴を設け娘よ翌日は
 宮本氏も石州津和野に趣かるれば、方々も悦び此場に於て御酒のお相手致さずや當分お目に懸れ
 ねど立身爲る其爲にお引移りに成なれば今お別れを申共決して其方は歡くまじ宮本氏にも御大
 望疾く果されし上からは娘を娶て未長く添遂られて下され度此儀は今より夫婦の者がお願ひ申
 すと述るにぞ左門之介は詞を改め如何にも其儀は仰せに及ばず某し志願を果せし上は俱白髪迄
 添遂申さん八重梅どのにも某しを嫌ひ給はず其時の至るを何卒お待あるべし拙者に於て違變は
 せずと顔見合して八重梅は其一言の嬉しさに思はず莞爾と打笑又恥しき前に立顔の紅葉を茜さ
 す娘心ぞ思ひ遣る母の松尾も傍より少しも早く宮本氏豫ての御志願遂られて娘の安堵致すやう
 今より妾も祈誓を掛御武運の長きを願ひ升ると婿に思へば尙更に行末迄も案じつゝ夫より互ひ
 ん杯の數を累ねて四方山の話しに時を移せしが何時か其夜も更しにぞ何れも打臥す程も然くぞ
 翌朝と相成ければ左門之介は暇を告て發足致し日數重ねて恙無く津和野に到着致せしに勘解由
 も大ひに打歡び此旨言上爲したれば侯にも深く御喜悅ありて近侍の列に召出され看籠も又諸人
 に越しが當時津和野藩中に一刀流の達人と尊敬るゝを鼻に掛飽まで誇る白痴者あり其名を鈴木
 源藏とて大酒を飲む其上に女色に溺るゝ者なりしが宮本親子が仕官の後は何時とは無に藩士
 等は皆宮本の武藝を慕ひ言今さぬと自ら鈴木が平常の品行を誹り或ひは武術に誇るを憎み大半
 教授を受ざる只管宮本の弟子となりしを疾くも源藏は之を知り借こそ宮本親子の者共我門弟
 を教陣し已れがへは入たる者が其返報は今に見よ屹度致さて置べきと佞奸邪智の曲者なれば
 勘解由に何か越度の有ば夫を種とし讒言せんと種々に奸智を旋しける借又宮本親子の者は津和

國侯の寵を受藩中の士にも親交し大ひに望みを得たる中にも、國て田丸將監より聞傳へたる一言
 には鈴木と名乗者なる由今藩中に鈴木と云ふは両三名は有と雖も身分正き人々なれば曾て怪む
 處なし察する時は源藏こそ武藝を云立御當家に召抱へられし者と聞疑ふらくは彼奴めが所業な
 るやも圖られず如何にも爲して証據を得んと左門之助共商議なし種々に丑夫を疑しける然るに
 鈴木源藏は己れが不品行の悪きを悟らず只管宮本勘解由を恨み渠等親子の來りしより我君寵も
 皆奪れ如何にも無念と思ひ結透こそ有ば欺き出し討果したる其上に當所を立退何れへなりと仕
 官をせばやと伺ふたり勘解由に於ては源藏の斯る野心の有とは知らず衛守を討し者なるか實否
 を爲と亂さんと日毎に萬事油断なく心を附て居たりし折柄嫂お久美の病ひに罹り看護の者の手
 助にぞ下女一人を雇ひ入しか之なる女はお常と呼て暫時の間其前に鈴木の家にお奉公せしと尋ね
 もせねど物語るに宜手係りと勘解由は悦ひ折々物杯遣はして下女の心を歡ばせ或日招いて他事
 の咄しの序に源藏が身の上をば尋ねしにお常は何の思慮も無く私し事は去年の秋鈴木様へ雇れ
 て御奉公を致す時何れのお方か存知ませねど一個のお武家がお出あり頼に御酒をば出せしが御
 双方共負す劣らず二升餘りも召上られ未には互ひの御自慢咄し私し事は御勝手にて其お咄しを
 伺ふ中に宮本様の仰せには如何程學者と言れても武藝に達せぬ者杯は取るに足らざる者にして
 我等が先年豊後にも國碁の勝負を致せし未思ひも寄らず口論し宮本衛守と云ふ者を歸路に待
 斬掛しに渠も同く扱合せしが何の苦も無く討果せしとお手柄らしくお咄しは私し事も恐怖なり
 早々お暇を戴きましたと下女のお常は何氣なく一部始終を物語るに勘解由の悦び大方ならず左
 門之助にも申聞察する如く敵と云ふは彼の源藏に紛れ無し早此上は聞得し始末且亦豊後て我兄
 の殺害されし事共より將監殿が求めたる小柄の儀をも殿へ詳細言上して御疑問をば願ひし上請

て敵を討取んと宮本親子の歡びは物に譬へん様も無く病ひに罹りて打臥せし兄嫁も久美に此旨を具に咄し聞すれば病疲れたる者なれ共餘りの事の嬉しさは枕を除て起直り最早敵を討得しごとく悦びながら勘解由に向ひ敵は鈴木源藏と確實に見認し上からは又今更の様なれ共思ひ當りし事ぞあり良人衛守が存生にて未だ杵築に在す折土州浪士の趣きにて鈴木一郎と名乗し者尋ね來りて仕官の儀を是非周旋してと達ての依頼然共良人は人体の不真者と知られしゆへ届ぬ旨を斷られしが其後聞は中國へ趣きたりとの噂さ故良人が横死を遂られても鈴木在所業と疑はず是迄ありし口惜さ少しも早く討果し歡ばしてと嫂が過し事共物語れば勘解由は固り左門之助も亦々大ひに打驚き惜こそ彼奴の大悪も斯迄露顯を致せし上は聊が遅々する處も非ず訴へ出んと親子の者は其手續きを爲したりける

第四回

源藏凶悪を逞ふして宮本を殺す
左門之助久留米に武勇を顯す

亦説宮本衛守の後室も久美には持病の爰に再發して日々重る并が中に敵は鈴木源藏と勘解由の具に咄せしに其悦喜は一方ならず其身も於ても起直り思ひ當りし事共を物語りせし翌日より尙又病ひの差募り鍼灸藥餌の効驗なく黄泉の客と相成ければ宮本一家は打寄て悲歎の涙に咽びしが最早返らぬ事なれば手厚く埋葬の式をも濟せ後懇ろに吊ひける辨説鈴木源藏は勘解由の越度と伺ひ居しが聊か之といふ事無く日々看籠の増のみなれば愈々恨み有ける内に衛守の婦が死せしと聞き初めて鈴木は心附緒こそ渠等親子の者は衛守の親戚に疑ひ無し我ながらにも竟之迄知らず居しこと迂濶なり察する時ハ彼奴等の敵と眼ふ者にも非らず慮危ひ哉疾く當地を立退て身の安全を圖るよ如ず又兵の與儀にも先ずる時は人を制し後る時ハ制せらるゝと倭伴集等も

今以て我所業とは余も知るまじ然らば勘解由を討果し遺恨を晴せし其上に後日の患へを除くと云ふは一智兩端の計策なりと窺かに邊を伺ふたり斯る事とは露知らぬ宮本勘解由は源藏の仇たる者と見極めて訴へ出とせし折柄嫂も久美の歿去しに悲歎を累ねて忌引に及び其當分は出仕もせず我家に籠り居たりしが佛事供養の其爲も寺院へ到りし歸り路夕日も山に影落て田の面の賤も立返る遠山里の鐘の音も隠に籠りて告渡り提灯をさへ持ぬ身は足元暗き木下闇然共馴し山路を急ぎて來る折こそあれ何國よりか放發けんつとんと響し砲聲諸共勘解由は胸部は打貫れ噫と叫んで倒れたり此時一個の曲者は茂れる敵を押分て現れ出しが莞爾と打笑右手に鳥銃を携へながら徐々其場へ步行寄り苦み居たる勘解由を捕へ翫り殺しよ爲て呉んと帶たる太刀抜放ち已に斬んと爲す折柄麓の方より誰やらか提灯片手に振照し此方を臨んで來る者あれば見認られては一大事と彼の曲者は一目散に何へなりか逃失たり斯と知らねば左門之助は父が歸宅の遅きに依り迎ひの爲と馳來りしに豈圖らんや勘解由には朱に染まし打倒れ苦み居たるに仰天なし疾くも膝に抱上て父上左門の參りしとぞお氣を確に遊ばされよ左門之助にて御座るなり敵と云ふは何者なるか様子は何に父上と聲を限りに呼立ければ勘解由は苦敷双眼を見開き子息なりしか遅かりたり我此處まで來る折思ひも寄らぬ後より鳥銃を以て打貫れ此の如くに重庇を受苦み居たる其折柄現れ出しては源藏もて尙も斬んとせし時に定めて汝の來るを知り逃去りたる者ならん我梁等を討んとして又々彼奴の手に懸り最斯を遂る遺憾さよ吾は此場に死る共汝らは何なる難苦をも凌ぎて鈴木を討果せよ父と叔父との仇なるそ我憤憤を晴せよと言終りたる其後は早事切て答へもせず左門之助は切を爲し胸も張裂如くにて悲憤の涙留め得る遺骸を抱きし其儘に氣絶爲す迄歎きしか自ら心を取直し我家に屍を引取來しに斯と見るより母親は氣も半乱の如くに

泣哭悲を理りなり斯て有へき事ならぬは叔母のお久美を尋りし光蓮寺へと理彈しけるか母は忽ち剃髮して菩提の爲と尼に爲り光蓮寺へと起きける此より宮本左門之助は仇討の儀を願ひ上しに津和野侯にも驚き給ひ勘解由の横死を歎かせられ速かに免許の御書に正宗の名刃をさへ給はうければ其悦ひの恨り無く且又母へは生涯の手當を爲し遣す間心置なく出立せよと重ねくの有難さに感涙袖を浸しける夫より旅中の準備も整ひ石州津和を立出しは正保四年三月四日の事にして左門之助二十年なり之より中國を渡る方なく探索せしが敵鈴木の踪跡は知れず然らば九州を尋ねて見んと此年九月の末つ方長州赤馬ヶ關より便般し豊前の小倉に到着し其國を尋ねしに似寄し者さへ有されは道を轉して筑前に到り豫て聞く當國の太宰府天満宮は靈驗著き神にして我家代々信仰なれば余も又祈誓を込ばやと直ちに太宰府に趣き管公の神靈を九拜し何卒敵を討しめ給へ此なる祈願を適ひ給はば私の一代の其内は人の命の危ふき事を眼に觸耳へ聞く時又武術を以て救へる事は必ず見通し申さすと誓ひを込て祈りし耳が天拜山の半腹に登り一七日の其間水垢離を取て荒行し同所を立出筑後に涉り久留米の城下に逗留せしが其頃塚原左源太猛虎と名乗劍道の達人あり其性豪強にして大酒を好み飽迄已れか武藝に誇り門弟等にも師を見倣ひ暴慢無頼の者多く頃は十一月の事にして樹々の梢も何時か紅葉染なす山の端の景色彌増す耳ならず小春日和に引續き日毎に暖氣なる儘に塚原を初め門弟等は紅葉を見んと打揃ひ朝早くより立出て正午過る頃横山の麓へ一同來掛る折柄左門之助も遠方近方の景を詠めて餘念なくイみ居たる後より一個の壯士か突當り直ちに其場へ立止り這は無禮なり其元には武士たる道を心後られぬや何れの藩士で姓名は何と貴殿は仰するそ此儘見通し申されすと痺き立を聞よりも後の方に扣へたる七八人の駈集り矢庭に前後を圍むにそ左門之助は大ひに驚き這は理不

盡と思へ共言立しても益無き者共謝すに如すと小腰を屈め何れの御人が存せぬ共小生迂闊にイみ居り太た失禮致きたり何卒此儘免われと詫るに附込白痴者が尙又聲を荒らけてイと居りて無禮せしとて憎き汝ちか一言なり突當りしを謝せしめて見通し呉れと申す共争か此儘免す可き我々共の久留米にて其名を諸國に知られたる塚原先生の高弟なるを見損したるかと言ながら拳を堅めて打んど爲すに其手を捕て擦上つ這は御無躰と突放すを斯と見るより門弟等は狼籍者と罵りつゝ擒にせんと立懸るを早是非なしと撥掴み手玉の如く投出す其敏捷に恐れを爲し猶豫折精立出しは即ち塚原左源太にて左門之助に打向ひ唯今門弟の者共が太た粗忽の詞より不圖御無禮仕り實にお詫の申さう様なし某し事は城下に於て町道場を相開き武術の指南を仕る塚原猛虎と申者貴君も諸國御修行と儘に見取候へば又も急きの御身にあるまじ何卒拙者の茅屋なれ共御尊來を願く且又唯今其元様の御腕前を拜見し驚き入て御座るなり其御手諫を門弟共へ平に御敬授下されなは拙者の満足之に過す御聞届あられよと言つゝ數人の門弟等へ一々無禮を詫させけるに左門之助も案外なる詞に却て當惑致し自分の出所姓名を具に明して諸共に無禮の段にお免われと今は互ひに打解て請るゝ儘に塚原の宿所へまそは到りしか左源太は直ちに酒肴數品を取寄殊の外なる饗應し其翌日と相成ければ塚原の門人替るゝ宮本を敵手に試合を爲すも誰一人として勝者なく此を見て居し塚原は心中無念と思へ共左あらぬ体にて進み出實に優れし御腕前小生如きが及ぬ共何卒も敵手下され度と身準備なして立分るに左門之助も無禮を述頓て互ひに道場の右と左りへ立別れしが宮本心と思ふ様左源太迎も腕前は高の知たる者なる可し打勝は逆手柄に成らす宜き程にして遇ひ置んと打込來るを受流し十有餘合も戦びしが其當代に二と下らぬ左門之助が精妙なる武術に争か及ぶべき打立られて塚原は己に危ふく見へけれ共左門之助

は打もせず隙を見せしに左源太は得たりと打込來るとは態と木太刀を受損じ肩口はつしと打しめて其儘後へ飛下り驚き入たる御手の内某し如き未熟者には遠く及ばずと一禮爲は仕て遣つたりと塚原は口へ出さねど心に悦び高々と動めかし褥の上に座を設け流れし汗を拭ながら宮本氏もお年齢に似合す中々健の御腕前今四五年も御修行あらば天晴熟達爲る可しと最早已れが武術に誇り眼下に見下す体なれば宮本心に可笑く思へど左あらぬ体にて禮を述已に出立爲んとせしが若しや鈴木源藏の手懸りにても有らんかと思へば尙も左源太の留るに任せて逗留なし門弟等へと尋ぬれど曾て様子の知れされば先當國には居らぬと見へたり然らば此地を出立せんと暇を告て宮本は久留米の城下を發足致しぬ

第五回

左門之助足代山に衆人と血戦す
伏狐少女と化して名士を誑す

初旅の見もし馴るる山々や又谷川の流にも其地くの風景の眺望も飽ぬ國々の名所古跡を探りつゝ左門之助は久留米の立出其夜旅宿の奥の間に身を横にして勞れたる足を聊か休めんと刀を片邊の床の間に指んとして不圖も鏢元をば詠るに柄袋の紐は解其上ならず前後して掛て有しに不審を抱き斯る覺へは無き者を如何致して斯ならんと鞘を拂つて打詠れば遣は開も如何に中身こそ未だ荒研の新刀なれば宮本の驚き大方ならず暫時は呆れて居たりしが皆は塚原左源太の我を欺き引寄置てすり換たるに相違なし彼の品こそは我君より仇討の爲め餞別に下し賜はる名刀なるを彼奴如き以奪はれては君へ濟さる耳ならず我武士道も相立ず然れば此より引返し取返しと思ひしが自ら心を押鎮め腕振ひて考へ見れど大小共に晝夜と無く身を離さず所持せし者を如何なる隙の有しやと鈍も眼を傾け居しに漸く有て打點頭我敵の家にて勸めよ任せ入湯致せし

事の有しを察する時の其隙に換換するも疑ひ無し我名刀を取返させんや何面目の有べきと其夜の中は馳返らんと手早く身支度致せしと忽ち大雨の降出し物の黒白も見分らぬ暗夜の事もへ是非も無く其夜を明して宮本は一目散り馳返り塚原の宿所へ趣きけるが此時左源太を初めとして門弟數人の者共の同國よても名所ある足代山に到り年忘れの一興も野試合を催す迎今朝何れも立出しと留守居の者の挨拶も然れば此より趣るんと塚原の家を立去り最早此日も暮るれば余儀無く又も一夜を越し其翌日に至るが否足代山へ馳付けり又塚原左源太の廣場に幕を張廻し門弟共の左右も別れ今中食の体あるよぞ左門之助の塚原此扣へし側も近附て逗留中の禮を述備某も貴家を立出不圖途中で先生の野試合のお催し有と聞き小生迎も拜見せんと立戻りてぞ参りしなりと言つゝ片邊も引寄ありし刀を把て抜放ち一眼見るより宮本は已れ左源太不届も我等が刀を換換て直襟帯る大膽者覺悟よ及べと立上れば左源太大ひに打驚き南無三方と思へ共一足後へ飛下り小刀手早く抜放せば左右も在りし門人等の仔細を知らねど一同も師の身も過ち有せじと命知老の若者共拔連く断て掛るを心得たりと宮本は奪ひ返せし正宗の名刀を以て斬卷り當るよ任せて奮撃突戦忽ち四人を切倒せど敵手も多勢の者ある故ますく激烈押取圍み無二無三も斬込來るを前も現れ後も隠れ恰も飛鳥の如くよて縦横無盡も相當る其敏捷は月光石火眼よさへ留らぬ計りあり然共塚原左源太は左門之助の一個を侮り門人等と諸共大喝叫んで斬立れば宮本迎も一玉懸命薄紙を諸々も負ながら秘術を盡して戦ふ内又も五人を斬伏れど未だ塚原への手も負さる余りも烈敵戦ひも刀の目釘折たるよや又弛みて抜る者の柄のみ手元も相残り後の名刀は左源太の肩よはつしと立も不思議や此方の宮本左門之助が是はと計り打驚き差添を抜く隙も無く危哉と思ふ其折柄幕張るせし後なる見上る如き大ひある梅の枯木の風さへ無き

(四十二)

根元の方より折る否門人共の其上に地響き諸共倒れよければ何の以て堪る可き即座よ四人打潰され其余の者疵を受けど不思議や宮本一人の危ふき刃を遁る耳の倒れ木よさへ觸されば其身なづらも奇あるを覺へ樹の間を潜りて遁れ出小刀を拔身構へ爲ぞ早塚原の門弟等純なき者も非せして抗敵氣力も有されば左門之助の吐息を繼ぎ左源太の如何せしと其近傍を尋るよ遙の離れし老木の元よ正宗計り有ければ其悦喜の大方あらせ手早く把上改め見るよ刃よ翻れし處も見へねば尙も自ら不思議を覺へ夫より山を馳下り逐一訴へ出けるが豫て塚原左源太の行跡不良のみ成らせ折々悪き風聞あるよ取糺さんとの折柄のへ忽ち數人の捕吏を塚原方へ差向られしよ最早透電あせしと見へ家探し爲れ共見へされば余議無く斯と言上り此時足代山よて手疵を食し塚原正生をも呼出し左源太の奸計を糺問せらるよ宮本此刀を換換あるを知る者ありて左門之助の訴へ偽り成らざる事明白なれば切徳とあり却て其武勇を賞され久留米の城下を立來し宮本心よ想ふやう足代山よて不思議も梅の枯木の倒れし如何も奇なる事よ一て今情々考ふれば是なん筑紫太宰府ある天満宮の某しを救はせ給ひし者ある左も無く致して大木の倒るし謂れ決して無し殊に梅の天神の深く好み給ふと聞く旁々以て某しの危急を憐れ給ふより直ちよ靈驗を現はせられ救はせられし疑ひるよと左門之助の自ら悟り筑紫の方を遙よ拜し尙も武運を祈念しつ夫より諸國を巡廻し諸侯の城下へ到る毎よ敵の在所を聞出さんど心を盡して索れ共會て鈴木の行跡の知れど竟よ慶安二年正月と相成けるが田丸將監の元へ久敷打絶て音信も爲さるより兎も角尋ねて參らんと豊後杵築よ歸き田丸の家へ到り處何時か他人の住家とあり構への様子も以前よ變り見知らぬ者のみ居るよ由り扱の轉居を爲れしか何國へ移住せられしや尋ねて見んと其家よ就て糺問せと更よ様子の知れされば大ひよ望みを失ひて尙

も諸方へ問合それぞ知者會て有ざるより是非なく其處を立圍て二月の初め豊前中津よ歸きて舟倉の城下よ至り此處よ足を留めて鈴木の在所を探りしも手係連も無き儘よ又もや其地を發足し尙も諸國を巡りて此年九月の末つ方伊豫の松山よ來りし此地の松平隠岐守殿城下よ一て尤も繁昌を極めし處より左門之助の旅宿よ留り源藏の在所を探らんと日々城下を徘徊し其月を越へ十月初旬とあり小春日和の長閑さよ此日も朝より旅宿を立出其處よ此處よと經廻る内漸次よ山深く入しよぞ借の迂濶よ歩行しより斯る深山よ迷ひ入り城下へ戻る路を失ひ今更何共爲る事能はせ誰よも來らば尋ねん者と前後左右を見渡せど松柏のよ生茂り白晝さへ暗き樹を闇谷間よ流るよ水の音岩よせめれて凄然速此宮本も當惑あし松の根元よ腰打掛須臾茫然として居たりける折柄谷の細道より年の二八を稍一つ越もせしと思敷美女髪の後へ結び下衣類の木綿を纏へ共鄙よ稀ある優姿麗を脊負て右手に草薙鎌を携へて徐々行歩來るよぞ近附儘よ宮本の詞を掛て呼止め我等の今朝ほど松山の城下を出て其所此所と見廻る内よ不圖も路踏迷ふて歸路を失ひ竟よ此る山中へ行吟入りて難澁致そ和女に逢こそ僥倖なり城下へ戻る道筋の何れ一往や敷へよと尋ねを受て賤女の須臾言葉も爲せして左門之助の顔打守りイみ居し何やらの心よ點脱順ての事よ打笑ひ嘸かし旅のお武家よ此山中迷ひ入りお困り爲る事ならん此地の松山の城下より八里餘りも隔てたる荒上山とゆる所人家の絶へて無き耳の樵の人さへ容易は是迄來る者も無し今より城下へお歸りあるの所詮及ばぬ事なれば此より委諸共よ今四五町をお出めれ至つて手狭よ在とれと我身の家の座座る故今宵一夜のお宿を爲べし翌日の松山の城下迄是非共用事の有儘よ妾の父と諸共よお歸りあれと賤女が最心切ある詞よ覺ひ然らば和女の厚意よ隨ひ一夜のお世話よ相成んと後よ續いて行けるが彼の賤女の先よ宜樹の根岩角纏ひ無く身輕よ歩行其

(五十二)

疾さ左門之助も劣らして女の後へ附随ひ脇眼も馴と急くと腹も痛共とれば其間十間程も隔るゝ
這の残念と馳山一凡そ四五町来一かと思へ何時女を見失ひ餘りの事茫然と左右を眺めて
イひ折しも年齢漸く十四五なる一個の男兒が現れ出手に携へし鎌をば打振已れ老狐遊一のせ
覺悟よ及へと言ふがら切て懸るゝ宮本の一足後へ乗下り我等を指て老狐と呼ひ甚九其意を得る
るなり仔細をせせと呼はれ共童兒の聊る開入と無二無三と切掛来れば左門之助は是非も無く然
共敵手の農家の小兒何程の事や有んと携へよりし鉄骨の扇子を把て待遇一か悔り難き童兒の敏
捷流石の宮本も斬立られし隙を覗つて踊り込鎌を撥一と打落し取て押へて動かさせ童子よ故
ち如何なれば我等を差て老狐と呼や某し事の旅の武士此山中へ迷ひ入り難澁致と者なるそ疾々
様子を物語れよと捕へし手を弛めけり

第六回

宮本悪狐を退治て童子を併ひ
高波村の農夫赤心を商議と

亦脱く宮本の童子は向ひ篤と心を落付て仔細を語れと言聞れば漸く有て頭を掻け何を隠さん私
一事の島波村の農夫宇右衛門の子息宇作とや者ある此頃荒上川の山中より折々老狐の現れ出
人よも屢々害を爲一村の難澁大方ならせ日々狐の在所を探り討留んと諸人の手配をせと陰さへ
見へと誰よも狐を討取者の褒美と致して五十兩庄屋の旦那が具ると云ふので及ばぬ事と知り
亦から萬一狐を仕留る時の褒美の金を貰ひし上他人手は渡して田畑を受戻さんと存知付腰庖
を準備ふし日夜を厭はと此山へ狐を討んと忍ひ入り今夜て三日三夜及へと怪き物の姿も見へ
き實の當惑致せし折柄不圖旦那のお妾を全く老狐の變化と心得斯る事無難よ及ひし事何卒
見下されと一伍一什を物語るゝ左門之助も大ひに驚し腹もはたはたもる事あり其し難今此處

(六十二)

跡踏迷ふて来る折しも二八酔りの婦人に出合路案内を爲て具ると我等に先立歩行しる職共
く其疾さ竟よの婦人を見失ひ須臾呆れてイひ折しも其方の拙者を老狐と呼斬て掛るゝ不審を
き思はず敵手を致せし者の察する處某しを尙深山へ引入て誰かさんと爲したるへし必せ今の婦
女こそ汝等の尋ぬる妖狐と覺へり疾く悟らば打取て手柄を急度致させんよ遺憾ありと物語れば
宇作も思はせ拳を堅め如何よも仰せの婦人こそ全く狐疑ひ無一口惜き事と咄く折柄何國共
く以前の賤女徐と共處へ歩行来て莞爾と計り打笑ひ旅のお武家よ何故よ我身へ續いて来ませぬ
ぞ餘りよ後れ給ひしと態々戻りて参りたり最早此身の家逆も程遠らぬ事なればお出あれよと
述るを聞き飽迄老狐の某しを誰かさんと謀るぞ憎し先討取んと宮本の刀の柄に手を掛る此時宇
作も携へし鎌を振上立向ひ女の面を一見見て和女の村の季子との如何して此所へ来ませしと處
ち詞を掛しよ左門之助も案外ある宇作の体も刀も抜せ二個の横子を伺ひ居よ娘の宇作へ云る
やう我身の此所まで来りよ和殿も豫て知る如く父が長らく病ひの床よ起臥さへも自由を得
夫に付ても薬と云ふの千歳を経たる赤松の根元よ生じた山菊の花を煎じて飲する時如何ある
強き疝癪も必と平癒と聞しよへ平常の來る事も無き此深山よ分登り日々探一索むれよ今見當
りやさぞと身上話一を宮本の片邊よ於て始終を聞き思はせ横手を確と拍ち能も揃ひ一二個の者
一個の諸人の災害を除くが爲よ義を重じ一人の親の長病を癒さん爲の孝なるの實よ稀ある其誠
心必せ二個の精神を神も感納遊され願望成就疑ひ無し就ての最早昏黄ある路案内を頼むぞ
と二個の者よ請ければ宇作も之より先よ立路程彼見三四町来一と思ふ其折柄左門之助の拔手
も見せせ彼の賤女を切倒とよ宇作の思ひ寄ざる事也へ驚く体を見るよりも宮本の又詞説とく汝
ち斯迄臆とるぞ是る婦人の入聞あらず其方が尋る老狐あり疾仕留よと屬され尙も不審イひ折

しも今迄女の姿と見へし、忽然年ふる狐と變じ手負あがらる。遂に宮本目撃て飛掛れど、又も願上へ斬付るに、字作の漸く勇氣を出し持たる鎌を取直し、横腹深く三ヶ所迄力の限り斬付れば、遂に其場より討留たり。此時字作の不審の晴れ且那様よ、如何して借かよ老狐とお見留有りや、私し事の始めより隣家の娘と違ひ無く聊の疑ふ處も有ねば、心を弛めて侶俱し歩行し、事の愚よと呆れし体よ、問ひけるよ、左門之助の字作よ、向ひ夫ある不審の尤もなり、我等後より附従ひ、婦女の姿を熟々見るよ、聊か怪き所の見へねと、先づ咄せし詞よ、明朝父が松山まで用事の有ば、同道させよと、我に正しく言あがら、又其方へ語るよ、父の長病を癒さん爲め、此山中へ來し趣き、斯くも詞の齟齬する耳の凹ミ、所の水溜留りよ、移りし女の形ちこそ紛ふ方無き怪獸あれば、直ちよ打留アせしあり、最前其方の咄しよ、老狐を仕留る其時、村の難儀を除きし上、褒美の金を得ると、此事是より狐の屍を以て汝が望みを果せよと、厚き詞よ、打悦び狐を背負て宮本と打連立て歸りしよ、字作の爺の馳出し、狐の死骸を見るよりも、呆れ驚く計りにて、須臾詞も無りけり、字作の父よ、打向ひ有りし事共、手短に物語りて、宮本を父の字右衛門に紹介すれ、爺の大地よ、平伏て神の如く尊恭し、鬼も角も通り下されと、親子の者の大ひよ、悦び是非く、涉逗留を願ひ升ると、切よ請はれて、宮本も急がぬ旅の事なれば、其の意も随ひ足をば留めぬ扱、又字作の其夜の中、狐を仕留し趣きを、庄屋の家よ告げるよ、九左衛門の大ひよ、驚き如何よ、狐氣の字作なり、其未だ幼年の身を以て、老狐を退治する事の成る可き不審さよと思へ、共來りて見れ、這の如何に疑ひも無き年を経、狐の死骸の有りしよ、驚き膽を冷して歸りける、又翌日と相成、高波村の諸人の字作が狐を討留しと傳へ、聞て打集ひ、吾もく、と見物よ、字右衛門方へ群集り、皆々舌を卷のみなり、然るよ、名主九左衛門の前よ、村中へ觸示し、狐を打ば誰よても、褒美と致して、五十兩差遣すと觸るるも、忽ち違背致せし者の其沙汰會て無き

(九十二)

故よ字作の自ら赴きて褒美の金を給はれと、才込しよ、九左衛門の其場よ、立出字作よ、向ひ成る程、先日某しの觸るる事、相違ふけれど、最早翌月の今日よ、與ふる譯よ、相成す此儀も、借其砌り月を越したる上、あらぬ與へぬと云ふ事迄も、俱に觸たる筈ありと思ひも、寄らぬ挨拶よ、是非なく、洞然立戻り、斯くと委細を物語れ、字右衛門の驚き、大方あらま唯忙然として、詞を斯くと知らぬ村中の甲も、乙も、口々よ、字作殿こそ、お手柄よ、俄分限に成らしつたど入り來る者、此詞を聞き、字右衛門親子の口惜さ、堪り兼たる事あれば、名主の詞を言聞て、落膽爲せし形勢よ、皆々又も、九左衛門が非道の所置よ、呆れ果、其様を腐敗根生なら、名主様との庄屋のと、尊敬事、少しも無し、狐を退治て貰ふた上、村一同に歡びなれば、此より名主の家よ、押掛假令月を越せ、迎褒美を、呉ぬ謂れ無し、村中残り、打揃ひ、字作殿の爲めなれば、庄屋の旦那へ、談判を可しと、一個の言は、一同の如何よも、其様ら我等も、共よ褒美、此金を出させんと、忽ち相談整ひけるよ、中より、老人の進み出斯く、皆の衆のお詞あれば、庄屋殿の強情よ、一端遣らぬと、言れて、決して聞ぬ性質也、へ大勢揃つて得れて、却て立腹爲る可し、左右なる時、お互ひよ、心地も悪く爲ねば、成らま夫より、筆を村の衆の何程宛でも、集金して、字作殿よ、進ぜも、ち皆の衆の心も、立又名主殿が聞れたなら、後より褒美を出せも、知れま又出さぬ、其恥るべし、私に何様よ、存知もあれど、如何の者やと、言出れば、集り居たる人々、何れも、其意も、隨ひて成る程、甚兵衛殿が言るよ、通り強情、我慢の九左衛門殿也、へ容易承知の致すまじ、其より、銘々僅宛でも、金を集めて進ぜる事、字作親子の爲ありと、忽ち相談一決して、金拾兩を取纏め、字右衛門方へ贈りしより、其悦びの一方なら、ま夫よ、引替九左衛門が、名主を勤る身て在りあがら、道よ外れた行ひと、親子の者の、吐き居る此なる、始終の事共を、左門之助の、逐一聞取村一同の、心切なるを感じ、且又名主の非道を、憎み自ら懷中より、金拾兩を取出し、字作親子を呼寄て、是の甚だ些少なれ、共我等かす

(九十三)

志受納よ汝が幼き身を以て諸人に秀て一舉動の我感せるは餘り有り尚ほ此上よも孝と義の必せ
忘却致さぬ様心に留て守る可し夫も付ても老狐の尻の何れへありと葬り遣るべし我等も急がぬ
旅おれ共尙ほ逗留して益無き某一修練も有べ又此後面會致して座らうと暇を告て立別れ土州
を差て發足致しぬ宇右衛門親子の宮本を國堺まで見送り別れを告て歸りし後惠みを受し金子よ
て田地を求めて農業を怠々勵まて在る

第七回

小松翁宮本は秘術を授て後難を示せ
獵夫大作雪中は左門之助を救ふ

仇を尋る旅の空何國を當と云ふも無く左門之助の此年十月下旬は及び土佐國足摺山に到りし
此地の名高き高山よて麓に至れば蒼海滿々たる大海原要害尤も勝れし地なるが此山中は住居を
爲そ小松右膳と云ふ者あり易學に達し鎗劍の術も長じ其頃有名の人あれば左門之助の此は便り
武術の程も試んと漸くよして尋ね當面會の儀を申入れ頼ての事主人と見へ年齢已も七十近
く銀の如き白髪は肩は掛り鬚は胸の下を過ぎ鹿の皮よて造りたる胸腹を上よ着し右手は一冊れ
書籍を携へ徐々歩行出たるが宮本の面を熟々詠め貴所は何れの侍人の知らぬぞ天晴見上も面体
格台身は大望を抱ゆるが是の必せ仇討める可し何れもせよ旅の侍人遠慮へ入らぬ此方と盲
葉の儘與へど入りし其体爲凡人もみ且又面を見るよりも仇討の大望ありと迄見貫し事の違は
ねば宮本心中大ひ驚き頼て草鞋の紐を解き足を滑て翁の居室へ徐々通る其折柄頭上を目掛て
何やら飛來るが宮本の肺を攪して避る間も無く又もや礫の面肺へ飛來る物の有りけるは身を
沈まして受流と其動捷は小松の翁の羽扇を把て莞爾と打笑實は天晴なる貴客の手練今の礫は老
人の云附置て致せし無禮も免れと詫よそ左門之助の頭を下け出辨姓名を具し告私し事は何を

(二十三)

隠ん翁の先見あられし如く身は復讐の志願を抱諸國を探偵仕れ共未だ敵は踪跡の知す就ては
翁の多高名諸國は溢しを以て是非拜顔を願ひし上武術の奥儀も多致授に預度と存知付參上致せ
し者なりと述を聞て打悦ひ如何も貴客の望みと有る小太刀の秘術を授へし併し今日此處で教
授致せる譯は行と四五日逗留爲よと翁の詞は宮本の一儀も及はず其意は隨ひ此處に足を留
めし或日翁の何やら机の上は凭て何と無く物案事たる体あるは左門之助の机邊に進み何とへ
先生の今朝より斯く煩は敷在するの何卒仰せ申れ度と切に請れて小松の翁の嘆と計り吐息を
續き又も宮本の面を詠め我此程より貴客の相を熟々考へ見る處天下は美名を上るおれ共二十五
才に至りお九死に及ぶ大難あり此を通る、其時の敵も首尾克討取らんが恐くは此災害は身
を過つ事無きよ非能々萬事は注意して死地は陥る事勿れ神の助を受せん太た危き事のと
有り且又敵を討得る共累て仇を討すんは棄置難き事の來らん我云ふ處偽りあらぬ假令何國も
渡る共能々諸事は心を留輕卒の舉動の致を可らと我此のみを愛るあり必と疑ふ事勿れ就し今
日小太刀は術を免許皆傳致を可し我に續いて來れよと庭に折立出行よぞ左門之助も其後より翁
も隨ひ往問も非そ小松の翁の谷際の際上へ立上り見下ると下の物凄き巖々たる谷の底迎も具定め
難き其處へ身を踊して飛込たり這は如何もと宮本の猶像居るを小松の翁の遙の下よて聲を
上續ひて來よと呼立られ左門之助も臆しはせと兩足揃へて飛下れ翁の莞爾と打笑をがら手
も携へし羽扇を以て岩角目掛て撥しと打ば未塵とありて飛散けり此時翁の振返り我等が秘術の
斯の如し汝ちも羽扇を受留見よと打て掛るよ心得たりと鉄扇を以て受流し十有余合も打合一の
翁は手練の凡ならん諸流に涉りし宮本なれ共打立られて竟も又鉄扇をさへ打落され早是迄と帶
たりし小刀を抜斬て掛れど小松の翁の者共せ受つ流しつ飛鳥の如く頼ての事よ不思議やる姿

は消て見へそなり一は如何せしと踏踏折柄以前の岳上は立現て宮本來れと呼立られ飛上らん
よも數十丈高き岳の上なれば唯茫然と見詰て居し翁は又ハ飛下り羽扇を以て宮本の利腕發し
と打よりも取て押へて動せし刃返さんよも磐石の下に成る如くして悶へる体を見るよりも翁
ハ漸く手を弛め此ぞ秘傳の我術なりと先や汝は皆傳と可しと是より秘術ハ固り槍刀の法を教授
しつ荷も再び身を踊せ飛上りし程も無く左門之助の手荷物及び刀を其處へ持來り最早是よて
事足る可し敵ハ當時中國ハ潜伏爲して在るなれ共討取る事ハ難ある可し鬼も角探偵致して見よ
再度我家へ戻りおハ路程三里も遠きを以て此より三崎渡會の間を過ぎ中村より久保川通りの間
道を越し高知の城下に至る可し就てハ宮本其方ハ誓言致し置く事あり普く天下を徧歴し本懐と
逐ふる其後の再度此處ハ尋ね來て艱苦を凌ぎし物語り我ハ咄し聞す可し今より樂を罷り在る必
せ忘却す可からせ且又前よせし如く廿五才よ至りるハ其身を急度慎む可し是耳ヲ聞置上ハ最
早汝ぢよ用事ハ無し疾立去れと云ふ否又ハ見上る岩上ハ翁ハ閃りと飛上りぬ左門之助ハ是を
見て遙ハ三拜九拜し同所を立出聞得し如く高知へ到りて逗留し尙ほ近傍を徘徊して十二月の初
旬となり阿波國劍山ハ分登りし此日ハ朝より雪催寒風膚を貫く計り人家も更ハ見へざれば
雪の降出ぬ其内ハ何れハなりと身を寄んと歩行ハ急ぎて來りし忽ち日さハ暮掛り雪ハ滿山ハ
降積りて行方の道さへ失ひけるハ流石の宮本も當惑かし如何爲んと雪中ハ須臾躊躇其折柄雪を
蹴散し大猪ハ宮本目掛て飛掛るハ心得たりと身を反り無手と組ハ猪も牙ハ掛んと勢ハ猛
く怒り狂ふて淋じけれハ聊ハよても手を弛めハ其身の最も危きハ引組たる儘上ハあり下ハなり
て揉合しハ愈々雪ハ降積り五牀の凍へて働き得せ竟ハ氣絶を致しける此處ハ阿州の其中よも一
層嶮き劍山麓々なる峯と三四町谷間ハ下りて字さへ鬼ヶ崎と稱ふる處ハ年久敷も住居を爲し世

(三十三)

渡る業も獵人の荒稼とる大作家ハ葉火を焚て五牀を暖め旅のお武家の心儘ハ持ハ如何よくと
呼はりけれハ漸く有て宮本ハ吾ハ返りて四邊を見廻し始めて大ひハ打驚き茫然として居るよ
ぞ大作ハ尙ほ進み寄り旅のお武家よ必せ共ハ不審給ふハ尤もあがら決して疑ハ召るハ實ハ先
刻雪中ハ大猪を見認て後を逐來りし處ハ武家ハ猪と諸共組たる儘ハ氣絶致して浮座る故貴客
を我等ハ脊負つし死ふる猪ハ四足を縛り牽摺來つて彼處ハ有り夫より種々手を盡し葉火を以て
暖めハハ浮蘇生有りし事ありと物語られて宮本ハ恰も夢の心地を爲し偕ハ貴殿の情ハ依り蘇生
ある者なるハ如何よも猪と組ざる迄ハ覺ハ居なれ共夫より氣絶爲しと見ハ更ハ覺ハ成
たるハ手厚き貴所の介抱にて蘇生致せし厚恩ハ謝せし詞も浮座無くと生國ハ勿論姓名をさへ具
ハ明ハ只管恩儀を謝しけれハ獵人大作家ハ宮本ハ出所姓名を聞と等く忽ち其身を謙遜何を隠さん
私し事ハ肥後の國八代に出生し稍成長ハ及ば一時人を傷めて事六ツケ敷竟ハ捕縛の身と相成斬
首ハ成る可きを綾部勘解由様ハ情よて所刑せられる命さへ今日迄も無事あるハ皆是深き浮
厚情今ハ忘却仕らせ其後肥後を立去て人傳を以て伺ひしハ豊後ハ移住ありしと迄承知致ハ
分ハ事此山中ハ獵師とあり己ハ十七年を過せ共浮覽の如き賤き世渡り竟ハ今まで且那樣ハ禮
の書狀ハ差上を唯徒らハ打過し罪ハ今更ハ奈ともハ解ハ可き詞ハ然共不圖ハ浮子息機を救ひ
ハ上たるからハ受し浮恩の萬分の一を僅ハ報ハ來れり併ハ未だ且那樣ハハ機嫌宜敷波らせけ
るハ此儀を伺ハ奉ると而目無氣ハ尋ねられ思ハ寄らぬ物語りハ左門之助ハ驚きハ又問はれ
たる事共を隠して益無き事ハ衛守ハ横死を遂たるより解勘由侶俱津和野ハ到り敵鈴木源藏
を討んと謀り却父ハ討れハ一と逐一致ハ物語れば大作ハ驚き大方ハ須臾詞ハ無ありしハ頓て
横手を確と拍唯今伺ハ鈴木とやらハ土州の者よて先名を一郎とハササキヤ若しハ尋ねの者ハ

ば當時播州姫路の城主榊原刑部大輔殿に仕へし趣き先頃聞得し事の有りし物語られて宮本の
 雀躍なして大ひに悦び如何にも貴所の言るゝ如く當今源藏と申共先に一郎と名乗し趣き始めの
 我等も知らざりしお衛守の妻の病死の際に思ひ出せし事なりと物語られしは覺へ有り且又此の
 源因の箇様々云々と具子細に語りしは大作迎も囁を爲し兎も角二三日保養ありて淨發
 足こそ然る可く必お姫路に在勤と可しと舊恩を忘れぬ大作の最懇ろよ心を附強て逗留を勸るよ
 宮本迎も雪中よて凍へし身あれば何處と無く身体大ひに疲れしもへ其意ふ任せて逗留して全快
 及びし事もへ厚く謝禮と申述又の而會を互ひに約し劍山の谷間ある鬼ヶ崎をば獲足るし夫よ
 り中國に渡り旅中と雖も油断無く其處よ此處よと立寄る毎に鈴木の様子を探りつゝ慶安三年正
 月七日播州姫路に到着せし城下の殊に繁昌し藩士と雖も最多く敵鈴木の在勤あるや其有無さ
 へ分らねば手蔓を求めて宮本の姫路藩の足輕部屋に住込名を三之助と相改め諸事萬端に注意し
 て茲よ月日を送りしよ或る日同僚河田九藏と云る者三之助に打向ひ貴所も常家よ住込れてより
 此迄平常の勤めかれ共來る五月に至りみれば遁れ難き大役あり是に定めて聞れしゝらん當り城内
 の其中よも天守臺の知らるゝ如く四邊の草木生茂り白晝よても物凄く其上よもお天守の長
 壁大明神と崇る荒神其夜宿直の者にても品行不良者かれは直ちよ多討を蒙る耳の時よ依つて
 其場に於て裂殺される事もあり且又如何なる人よもせよ二重のお櫓まで登りなば即座よ命を取
 るゝ事我等も存知て四五人あり貴所も壯年の身あるの故よ血氣に任せて櫓よ上るゝ但し侮る心
 を出さば直様多討を蒙る可し其靈驗の荒高なれば一人として恐れぬ者無く其當番よ至りおば能
 々諸事よ心を附侮り箇間敷行ひに決して致し給ふよと最心切に物語りぬ



第八回

宮本天守より上りて不圖官女を見ゆ
寶劔紛失して宮本冤罪を受る

梟松桂の間に鳴狐蘭菊の叢らに狂ふ寂々寥々たる姫路城中の天守臺より宮本左門之助正光の其身
當番あるを以て夜半に及へと睡眠もせせ夏冬の離も颯々吹入る風も何と無く身は染々と湖寒
く最凄然事なれ共會て恐るゝ心も無く悠然として居たりし同儕河田の物語りも長嶺明神の荒
神もて直ち罰を當る耳の甚だ敷く至つて引裂殺す赴き成る假令如何ある神もせよ即座
よ人命を斷と云ふの尤も不審の事共あり且又二重の櫓まで上りし者も其場に於て絶命爲すや
聞及び一の尙更奇怪の事のみあり察する處此櫓も年經一狐狸の栖所と爲一人を害ふ者ある可
余人の兎も角某し争の害を爲し得んや全く狐狸の所爲ならすば如何ある神を祀りし者の其神
体を昇屈んと手は雲洞を携へながら詰所を立出宮本の四邊よ心を配りつゝ二重の櫓まで上り
處更に怪き事も無ければ蜘蛛の巢計り面に掛り折々眼に遮るゝ此蝙蝠の飛る可一尙ほ三重の
櫓を如何と下より窺ひ見るゝ天井を走る者音の鼠を逐ららんか左門之助の莞爾と打笑
臆病者の癖として聊もよても物音なれば必は妖怪の所爲といひ或は神の罰ありと言觸せるが倣
ひあり此ある二重の櫓の上れと會て怪き物さへ見へぬ片腹痛き事なりと獨り可笑想ひつゝ又
も三重迄上りしは塵埃りの山の如く踏入難き程なれと是等の事は躊躇へき尙ほ雪洞を振照し正
面の方を詠むれば朽果なれ共神殿の如き者こそ有るゝ直ち進んで扉を開き其ある中を偵ひ見
れ如何なる人の木像もや衣冠正しく安座の体二躰並んで在りけるゝ左門之助の手を指延取出
して熟々と其容貌を打詠るゝ織田右大臣信長公も關白豊臣秀吉公の肖像あれば之は領着て拜を
遂元の如くは納め扉を締て宮本の獨り情々考ふるゝ當城こそは秀吉公は中國探題もて在せし折

折彦建策の者なれ其後羽樂家の醜あるか公等の像を作りし上此も祀りて置る成らんか此兩
將此武功こそ本邦比類無き耳から智勇を兼たる名將と只管両公を追賞して須臾餘念も無り
よ颯と吹來る風侶俱今神殿の後より徐々歩行出たるゝ十二重の衣を纏ひ緋の袴を著るゝ宮
女の左門之助も打向ひ是まで數年の其間も天守番を勤る者一人として此處迄登りし者の無き
中も其方の能も来りし者も我身の神も侍き中濱長と呼ぶ者あり其方が勇氣を感せしより此短
刀を取可し辭退し及は是受納よと大和錦の袋も入し一品を差出すと思ひ寄さる事ながら聊
も疑惑の心も無く押戴きて受納宿直を濟して宮本の宿所もこそ引取ける扱又城主榊原刑部
大輔政房殿も此年涉在國もて殊も若君よ初の端午の節句あり迎か家の寶物小鳥丸の名劔
をお床此間も飾り武運長久を祈るか爲め寶劔より取出し夫々係りの人々も己も飾り附を
爲んとする前夜も至りて寶劔のみ紛失致した事なれば君へも此旨言上して一家中の人々の賊の
詮議も手を盡せと忍び入たる處も知らず何れも奇異の事共と尙は探偵を爲れけり此時一番部屋
の足輕もて宮本三之助と云る者も家の寶劔を所持爲と趣き訴へ出る者の有るゝは偕こそ彼奴の
當家へ近頃新參の者なれば如何ある素性の知る奴なり取逃さそよ召捕と忽ち數人の捕吏の
と一度も踏込て有無をも言せ縛上糺問所へと拘引たり此時奉行早瀬内記を初として吟味役の
人々の列を正しく居並び在し三之助も打向其方當家へ住込しゝ家の寶劔を竊盜爲め奉公せ
よ疑無し出所姓名を具しせよ且又何の口よりして奥彦殿へ忍び入しを疾々白状も及へよ
し偽陳も其時の手酷き拷問も及ふ可し包匿さそよ上よと嚴敷糺問を受たれ其身も寸毫の覺へ
も無けれと其身も儘も寶劔を所持爲し居たる事なれば今更官解詞も無才智優し宮本も其心氣
恍惚として我ながら如何なる者より受取しか今更合點の行されゝ眼を閉て心を碎き考へ見れと

(八十三)

不思議にも一向覺への有さるよ言解んよも其術なく唯俯いて在る耳なれの内記の忽ち憤りを現し所詮此奴の常尋よ白狀爲そ可き者ならぞ拷問を可しと言渡せの已よ準備の有りしよや忽ち木馬を牽來り三之助をの此よ乘しめ左右の足に大みふる二つの石を縛り付車仕掛の木馬をば法庭の左右へ牽廻せに何を以て堪る可き聲の破れて血の流れ左右の足の抜るよ如く然共宮本の苦痛を忍び一言半句も言はねの尙又手強く拷問せられ氣絶致せば藥りを與へ蘇生致せの始めの如く斯く拷問よ及ぶ事遂よ七日よ及ぶ事唯差俯て考へ居り決して一言吐されの又も早瀬の指押をなし今回の水責よ致して見んと其なる準備よ掛る折柄不思議ある哉忽ち大風咆と吹起り砂石を飛と耳から老屋根を破り塀を倒して凄しく法庭に在り一人々の驚き恐れて迷迷ふ此時國老黒島左膳の家の寶刀を窃盜ある三之助と云る足輕を日々拷問よ掛る共一言半句も白狀せずと郎中の評判なれ如何なる様子か見届んと法庭の別席に座を設け宮本の体を詠るよ最早身軀瘦衰へ見る陰も無き体なるの其人相を熟々見るよ人品骨柄賤しむらど決して賊を働く可き者共覺へせ且賊心の者あれの盜し品を其儘よ已れの部屋よ置可き様なし假令捕縛よ就く迄も直ちよ透電爲そ可きを安閑として所持居るの更よ合點の行さる事と獨り熟々想ひし者から早瀬内記に打向ひ斯る暴風よ臨みての今日の吟味も相成難し囚人三之助の入牢せしめよ我等も退席致さんど已よ其座を立んとする此時不思議や宮本の忽ち閃りと起直り早瀬よ向つて両手を着私し事も今日迄一言としてや上ぬの盗み覺への無きハ勿論如何ある者より受取りしハ心氣恍惚として覺へざりし今不圖も寶劍を下賜せられたる其時の事を思ひ出して汚座る故透一言上仕らん當月三日の夜に至りて天守番の役よ當り詰所よ扣へて在りたれ共豫て同僚の咄しよハ二重のお椀まで上るよ於てハ長壁明神の汚罰を禁り直ちに一命を失ふもへ必き上る事勿れ其上るらる悔る心を出

(九十三)

じても即座よ神の汚罰あり就てハ謹慎獄にして詰所の外へ出るなと堅く付られたるの假令如何なる神もせよ不敬を爲ねハ一命まで取るハ謂れ決して非を免も角試みて見ん者と二重のお椀まで上りし所蜘蛛の巣計り面よ掛り別段怪しき事も無く亦三重へ上りよ塵埃りのみ山を爲し是又奇怪の事も汚座かく正面の神殿を開き汚神軀をも拜せしよ織田信長公と秀吉公の汚木像もへ此両將を合祭して長壁明神と崇るよや最も不審と存せれ共其儘よして私ハ己よハ天守を下るの際官女一人立出られ我身の神よ侍きや濱長と呼ぶ者なるの之まで誰もハ天守へ上りし者此無き中よ其方のみの恐れもせせ能も此迄來りし者かや褒美と致し取とべハ辞退致させ受納よと袋よ入し短刀を汚手渡しよ頂戴し其翌朝よ此段を汚屈上しよハ賊の汚嫌疑を受ざる耳のお上へお手敷を掛ざる者と今更後悔仕れど其翌日如何なる者よや終日終夜身軀勞れ前後も知らせ打臥たるよお捕へとなり夢の如く白狀せよと嚴重よ日々汚吟味を受るよ盜し覺への汚座らぬ故心を碎き考ふれど是又不審の事あがら心氣恍惚として考へ出せ然るに只今忽然と吹起りよる天風よ不思議なる哉漸くよ思ひ出して右の段透一言上仕ると聊か憚る体も無し詞爽然よ演けれハ奉行早瀬の冷笑汝が斯く迄詞を巧み賊の汚名を邁んとハ片腹痛き言上あり飽まで偽り陳せる上の亦拷問よ及ぶ可し者共準備致せよと息巻猛く言渡せを黒島左膳の内記を制し今三之助の申立るの浮妄の詞よ似れも其強ち虚言共よされせ我等よ於て思ふ仔細の有るよより今日限り三之助の糺問を止む可し不日拙者の沙汰をる迄ハ手厚く介抱致し置れよ此段急度よ渡すと言葉ハ儘席を立左膳の宿所よ歸りける後よ早瀬の不審と抱けよ國老此指揮止難く三之助をば入牢爲しめ別段手當を致させて其夜黒島の邸よ到れば左膳の直ちよ奥深き一室よ於て對面し定めて貴殿も某しの所存を不審と思とるならん拙者に於てハ三之助の天守よ上りし始末を聞くに渠

(十四)の言立ハ偽りなるまじ先の城主羽柴勝俊公の其砌りも天守臺より上りし者ハ直様行方の知れなきなりしと其後慶長五年より池田家二代城主たれ共會て上りし人も無く元和三年の頃よりして本多家三代寛永十六己卯の年より松平忠明同く忠弘の所公城主たり慶安元年より松平直基同く藤根の君が城主として此間凡そ五十餘年及ふと雖も皆神罰を恐れてや長壁明神と崇る耳よて誰逆天守の三重迄上りし者の無き事ハ何れも傳聞する處なり然るも足輕三之助ハ其事共を聞得し上は道理ハ悖る處を以て伊神跡を見届ハ愛ぞ凡人の爲し得るや正しく三重迄上りし証據ハ織田豊臣の両公の伊木像を拜見せしと言上せしハ虚言ハ有るまじ渠の三重より上らせハ我君を初め某一よても如何なる神を崇めし者よや會て知らせよ有る可き事なり且又官女の現れ出寶劍を與へしと云ふハ如何ふも奇怪の事あるが此等を以て考ふるも全く變化の所爲よ一て三之助を誑めし寶劍をも與へし者か左も無き時ハ如奈して盜ミ出す事成らんや又紛失の寶劍を所持爲と上ハ賊名を免れ難き事あむら渠の心腹を推量るも決して賊を働く可き卑劣の者共思はれ全く賊心ある者なら奚ぞ盜みし寶劍を己れが部屋に飾り置く可き直ちハ遁亡せへりしを其儀も無く一て在りこそ之竊盜を爲ざる証據と拙者ハ認定致せしかり已ハ寶劍も上へ返り又我君も人間業よて盜ミ出せる處ならねハ如何にも不審と仰も有り旁々以て某ハ貴所の越度ハ成らざる様萬事自ら引受て三之助をば免す可し此旨心得置れよと黒島左膳の詞ハ依り内記ハ異議無く其意ハ隨ひ暇を告て立歸りぬ其翌日より藩醫澁川嗣庵の曰々宮本を診察し手厚く治療を加へける

第九回

靈夢も感じて黒島左膳宮本を救ふ
姫路の天守ハ宮本老狐を退治す

姫路の國老黒島左膳ハ奉行早瀬内記の還り後ハ一個蒸々以爲吾語の夜ハ不圖も日頃信せる天

浦宮の靈夢を思ひ合それハ此必老三之助の冤罪を神の救へよと告しめ給ふ者ある可し就てハ遷を足輕如き仕へ置く可き者あらぞ何の功あらば近侍の中へも差加へんと心の裡ハ考へ居しハ切宮本も日敷を累ね醫師の治療も充分なれば忽ち全快ハ及びハ左膳は大ハ打悦び或夜三之助を密に招き汝が先頃ハ天守よて官女見へし其時ハ寶劍をもら受納所持爲したるより嫌疑を蒙り拷問までハ掛られたるが我等ハ於てハ其節より汝の所爲とハ聊ハ存せど如何にも不審の事あれば一時吟味を中止せしめり就てハ其方ハ心得ハ官女の姿で立出ハ如何なる者と存せるや所存を逐一聞よと左膳の詞ハ宮本ハ吠と計り頭を下小生迎も今更ハ何を包み隠しやさん前の日言上致せし如く神ハ侍く官女もせよお家ハ寶劍を取出し與へられハ考ふるも全く變化の業みらせば争ふ所爲の成る可き唯其上ハ願ひハ今一度ハ天守に上り妖怪變化を見届度若し能はざる其時ハ如何なる嚴刑に處せらるるも誓つて恨み奉つらぞと思ひ切ある一言に左膳ハ直ちハ免せしよと宮本の悦び大方あらぞ夫より部屋に引取來れば同僚の足輕甲乙も三之助が盜賊ありと打寄る毎ハ隔き居たれど忽ち無罪の身と相成り歸りて來ハ又驚き何れも不審を抱きハ先恙無きを祝する折柄三之助は同僚の者ハ打向ひ定めハ諸君も某ハを窃盜なりと思せしならんが全く潔白ハ身なるを以て漸く放免せられり就てハ尙ほも五六日ハ天守番を勤る間ハ當番の方々ハ何卒拙者へ代勤を仰付られ下されよと思ひ寄さる願も悦び其場ハ居合す人々の異議なく承知致せしよ此夜あらハ一宮本ハ一個天守の詰所ハ至り聊ハ心ハ油斷無く夜半ハ及んで三重の伊橋まで上りしハ更ハ怪き事もあハ空敷詰所へ退きしに夏の短夜の事なれば何時か其夜も明はける斯の如く事六日ハ及べ會て妖怪の陰だ見へねハ大ハ望ミを失ひける然共聊ハ勇氣を落さず又も七日目の夜ハ至り天守の三重ハ上り妖怪變化の出て見よ

(二十四) 唯一打と身構へ爲し漸次よ時を移せし處此夜よ限りて梢を拂ふ松風の音さへ絶へて無く夜は深々と更迭るよ別段奇怪事も無けれど只管睡眠を生ずる耳の俄然よ寒氣を身よ覺へ宛然雪中よ在るが如く手足も凍る計りあり遣へ又不審と四邊を見れば何時の元の雪洞よ燈火さへも消果て黑白も分たぬ深の暗此はと驚き手疾くも準備の擦火を取出し再度燈火を照さんと手元を探れども又も奇怪や雪洞迎も有されの楮こそ怪魔此所爲と見へたり遣へ口惜と嚙を爲し躊躇折柄誰やらあ上りて来る者あるよ暗夜あがら宮本ハ刀の柄に手を掛て寄らハ斬んと扣へたり待つ間も非せ上りて來しハ國老黒島左膳よて片手よ提灯を振照し右手よ手鎗を携へたるの身支度迎も嚴重よ打扮宮本の前よ來るの否如何よ三之助妖怪變化の出ふるか其様子さへ今以て更よ知れざる處より我等も汝ぢよ力を添若し怪物の現れなハ俱ふ打留すさん爲め深夜を冒して來りし者あり何の奇怪事ハ無きやと尋問を受て宮本の發と計りよ頭を下遣へ有難し元老よハ深夜を厭はせ給はぬ耳の侍さへ召連絡はす野生の安否を知らんか爲侍尊來こそ忝け無し就てハ言上此事こそ有り當夜よ於て七夜あれ共會て奇怪事もあく宿徒らよ斯く計り宿直の如く扣へ在りしハ實ハ先刻不審よも自然と眠氣を生とる耳か俄然に寒氣を身よ覺へ驚き見れば何時の燈火も消て暗夜とあり準備の火具を出さんよも是又手元よ侍座らぬ故當惑致せし其處へ侍尊來よ預り三之助の身よ取如何計り有難く存し奉ると低頭平身して述べれば左膳ハ莞爾と打笑其謝禮よ及ばぬ事今其方の物語も俄然に寒氣を催す耳の燈火も消て雪洞とら行方知れとよ成しと云ふ如何よも奇なる事共と左膳ハ其儘立上り自ら四邊を見廻せと自然と積りし塵埃の山を爲したる計りよて眼も觸る者さへ無きよ又も其場へ腰打屈め聊の油断の体も無く亦宮本よ打向ひ其方か刀ハ新刀あるや但し古刀の知らぬ共通れ美事の拵へあり一見せばやと請はるよ思はず吠と頭を下足輕風情



左門之助

(四十回)の私一なれの中々伊覽小供ふ可き名作よてい伊座らね共仔細あつて舊主より恩賜を受て所持爲
と者ゆへ兎もあれ伊一覽下されよと刀を前よ差出せば左膳の取て打詠め中身を見るよ差添り序
よ一見致さんと刀を左手に搦り詰右手を延して宮本の帯ある小刀を取んと爲とよ宮本疾くも心
附已れ妖怪通しはせせと抜手も見せせ飛掛り一聲上て斬付たればキヤツと叫んで手答せしる今
迄黒島左膳と見へし姿の忽然消失て又も暗夜と成る耳の俄然家鳴震動し魔風の响と吹起り起
居もみらぬ計りなり然共宮本の怖るゝ事なく尙ほも小刀を閃かし前後左右に心を配り油断無く
して有りけるの一層烈く揺動き今や天守も崩る計り又其中は礫の如く面を目標て飛來る者い宛
然霰の降の如し此を避んにも暗夜此事の古今無双の宮本なれ共諸々は礫の當りし者あら面を
上ん様も無く思はせ頭を垂ける折しも襟髪揃んで何やら引立行んと爲しけるよ已れ妖怪覺悟
をせよと振向様を宮本へ力を込めて刺貫けば又も叫びて荒廻り頭上を目標て飛掛るを心得ありと
暗夜みづら横は拂ひ一刀よて儘よ其場へ斬倒せと尙ほ妖怪の勢ひ猛く咬付んと狂ひ廻るを仕
濟したりと一太刀迄勢ひ込て斬付たりしに何の以て堪る可き動と倒れて其儘よ悶へ苦む体な
れば愈々勇氣十倍して又も數ヶ所を刺貫くよ漸く息の絶へけるや動めく様子も有されれば發と射
りよ吐息を繼ぎ尙も聊か油断無く四方よ心を配りつゝ夜明を待て天守を下り黒島左膳の邸宅よ
到り昨夜の始末とや入るに左膳の斯くと聞より直様居室よ招き入又も始終を聞が否一度の驚
き一度の感じ夫よ付ても妖怪の疾くも悟りて我等と變じ汝が此兩刀を取上て咬殺さんと謀り
ならん畜生かから恐敷工を致と者かかと左膳の舌を卷て驚きける又宮本の身軀よ手傷も有り
やと改むるよ衣類の數ヶ所裂たれども身内に疵のなきも不思議や梅の青葉の數知れせ身の内よ
りて出ければ左膳の勿論宮本も這へ又如何よと打驚き互ひよ面を見合して須臾詞もあかりけ

る漸く有て黒島左膳の夜天神の靈夢よ由り汝の冤罪を知る者あら身よ引受て免せし事共落る
く始めて物語り就てい如何ある妖怪ある此より見届ゆさんと手早く衣服を改めて若侍ひを相
從へ白晝とい雖も薄暗きお天守臺の事あれば各自提灯を振照し漸く三重の櫓まで上りて見れば
白面三尾の古狐の朱よ染りて死しる体は何れも驚き恐るゝ計須臾呆れて詞もなく互ひよ面を
見合と耳此時左膳の下知を爲し老狐の屍を延よ包み漸くよ一引下し藩主へ斯くと言上せしよ
政房公も驚き給ひ且又屍を伊覽あり並居る武士も侶俱よ身を震はして怖るゝ計り夫より城外
一里を隔て字黒木と云る處よ非らゝ祠を建て祀られたり又藩主よ宮本の武勇を深く愛させ
給ひ老臣黒島左膳を召し内意をゆ含められよ左膳の或夜宮本を私邸よ招きて我君より近侍の
内よ加へんと已よ内命を蒙りたれ共此まで其方等が本國も曾て承知もせざりよ元來流浪の身
分よ有まじ苦らせば某しへ逐一聞られ度將又外よ志願の非をば當家よ事へる所存のあきや
腹藏のなき處をば委細に物語られいへ此儀を問はんが爲よ招き一事と聞より三之助の三拜な
し生國及び本姓を具よ告て扱云ふやう身よ復讐の大望迎も親と叔父との仇敵討取まてい何方へ
も仕官の成らぬ身の上あれば太守の貴命元老のかく迄厚志給はる共伊受爲難き拙者の身分何
卒此儘お暇を下され度との一言よ左膳の本意ある思へ共復讐の大望有りと聞き一箇落膽致せし
が亦宮本よ尋るやう其元仕官の望みを断ち仇たる者の踪跡をば搜索せらるゝ爲あるや當家の足
輕と往還れし何の仔細の有るとよ此等の辭をも某しへ物語られよと問ひ掛られ如何よも定
めて元老よ不審と思し給はんが今更何をか包まさん敵と云い土州浪人鈴木源藏と云る者近
頃伊當家へ仕官に及び罷り在るよ承知を致し實否を見届ゆさん爲遙々伊地よ到着し手藝を以
て漸くに伊足輕との相成たれ共未だ鈴木此在勤なるる但し伊當家よ居らぬ者にや實否と雖も

(六十四)

今日迄探り出さざればと打明したる物語りも左膳の聞て打驚き承知致すの初めてあるが如何にも鈴木とや者當家よ仕官致して居れ共昨年儘八月頃江戸在勤を命ぜられ江都よ出府仕つれり某し事ハ其者に纏一二度所用の節面會致せし耳あるは篤と面体を覺へざれ共以前の土州の産なる由姓名迎も違はねば疑ひもなし仇人ある可し然ば當地よ呼寄て貴所此存意よ任せんと飽きて深き左膳の精神左門之助ハ之を謝し其心ハ有難けれ共渠も尋常の者ならん如何ある事より聞出し逃亡まじき者よも多坐なく其より鈴よ某し此江都よ到りて討者ならば争の仕損じ可き決して伊配慮下さる事と思ひ込れたる一言よ然らば貴所の伊隨意ある可くと言つし左膳ハ懐中より金子の包みを取出し此の甚だ些少なれ共拙者の寸志も受納され就ての今更の様あれ共お尋す事あり前の日妖狐を退治られ我等の方へ参れしよ其時貴所の身内より梅の青葉の數多く出たる事ありるが己よ某しの靈夢と云ふハ日頃信ぜる天神の我執邊よ立給ひ貴殿の冤罪を救へよと告させ給ふと夢見しハ前よお咄せし今又情々考ふるよ梅の青葉此出たるハ全く神の其元を護り給ひし者あらん其証據ハ數ヶ所衣服の裂たれ共身内を傷を受さるハ實よ不思議と存せざるあり又貴殿も天滿宮を信仰せらるし者あるハ此儀をお尋す度と問掛られて宮本ハ左膳よ向つて答ふる様如何も今回私しの老狐を退治致せし神此力を得ざらんハ争の仕留る事の能はん實ハ祖先の頃よりして天滿宮を信仰し且小生よ至つてハ身よ復讐の志願も伊座れば旁々以て祈誓を込し未だお咄しやされ共先に筑前足代山よて塚原左源太と云る者並よ數多の門人等と接戦致そ其砌り已ハ危ふき其折柄梅の枯木の忽然と多くの者の上よと倒れ討るハ處を助りし全く神の救はせ給ふ者ならんと片時も忘る事ハ多坐無く且今回の事共ハ別て天神の加護よ依らざれば留す事の能はん一度あらん二度迄も護り給ひし有難さと筑紫の方を遙拜せば左膳も愈々天滿宮

の靈驗著しきを感佩し尙は宮本に心を添養る方あき誠心に左門之助ハ厚意を謝し且誠別よと差田せし金子を辞退致されと左膳の會て免さねば其意ハ随ひて受納め又藩主も宮本の復讐の志願あるを以て仕官の望無き事を黒島よりの官上にて詳細聞し召れし故大ひに失望せられし頃て宮本を呼出され手ら金子若干を賜ひ以來出入を致せよと厚き伊詞を賜りて左門之助ハ有難き仕合なりとお情に及び左膳へも再會を約し姫路を竟よ發足致せり

第十回

宮本龜戸村ハ婦女の危難を救ふ
宮本旅泊ハ山邊大之進を戒む

(六十五)

借も宮本左門之助ハ姫路藩主の愛させ給ひ且又老臣黒島ハ厚意を以て仕官の儀も屢々勸めたる迎も身よ大望を抱き一故暇を請ふて姫路を立退其年七月中旬頃江戸表よ着けるが諸侯の城下と事替り三都の中の大都會見者をして眼を驚あし其繁昌營へん方ある夫より榊原家の上邸よ到り敵鈴木を偵しよ豈圖らんや源藏ハ在勤中よ不埒の事あり已ハ糾問せらる可きを渠も悪事の露顯を悟り先よ逐電致せりと詳細知れて宮本ハ一個落膽致したれ共是非なく旅宿よ光陰を送り其年を越し慶安四年正月と相成左門之助廿三才となれり當時暖氣打續き梅花の盛りと及び龜戸村の天神へ參詣せばやと宮本ハ旅宿を疾く立出しが又此村ハ鎮座せる天滿宮ハ筑紫太宰府よ有る飛梅を以て神像を造り當社至寶と稱するハ菅公此佩せられたる天國の寶劍あるが當時勸請の地と云ふハ今の宮居より東南の方よして耕田の中よ有りし者あり今よ元宮と稱せる祠あり其後寛文三年よ至り當今の地よ宮居を營み心字の池樓門等總て社頭の景色宰府の傍げを摸せり同く十一年後水尾帝震翰を瀧ぎ管神の尊號を賜ふ又元祿十一年一社の神事法式等宰府本宮の例よ准す可き旨同帝の勅許を蒙りし者あり這ハ賢言よ似たれ共因よ依つて茲よ録と却説宮本ハ神殿

(八十四)

よ腕づき一心を凝して祈誓を込頓て社内を立出し、最早正午共覺ゆる途ある片邊の割烹店に到り中食を爲て居たり。隣座敷の客と云ふ侍二人を供し連親子と見ゆる女客其内處女と覺敷の年齢二八の春を迎へし計りの美女よて皆中食の折柄何れの藩士の知らぬ共七八人の打連立又も此家に入來し奥の一室を座を設け不行跡なる酒宴を做し打興じて居たり。中より一個か夫へ立より奥の一室を指しつ男計りの酒宴て一向面白らぬより僥倖彼處の婦人連あり率某しの無心中娘を借りて參らんと最無遠慮も入來り我等の傍覽せられし如く男連も興も無し須臾の間お娘子を酌の敵手よお貸われ此儀をお願うさん爲め推參致せし者ありと聞て驚く處女の母親聊か席を進み出如何なる事と存じの外思ひ寄らざる其お詞姿の人並に在り世間知らその處女育ちお酌を致し事さへ知らぬ不肖者よ傍座り升れば此儀の免下されと否むを聞より武士の咄と計り着座込其傍配慮の及ばぬ事お育ち柄も最前より篤と伺ひ罷り在假令お酌のせられ共我等の酒宴の席へさへ鳥渡臨まれ給ひし上の直様お返しなり何も左程も親御の心配爲る事に及ばせ傍迷惑の存せぬ共暫時の間是非共拜借致さん其爲も推參爲しある者あれば今お斷りを受ければ迎おめく席へ返らねば余り無遠慮の儀みれ共聞入給はぬ上からら連すて參らんと近附よりて手を捕へ立上るも母親も供人諸共押隔宥め賺せを聞ばこそ又も二人此武士の現れ出て某しも拜借致と連中あれば力を添んと馳入る体を最前よりして宮本の始終の様子を伺ひ居しは餘り無禮を盡せる可の娘親子の難澁を見兼て夫へ進み出諸君の何れの傍の知らぬと斯く迄否む傍婦人を是非よと望み召るる傍酒の上と存せれど道も外れた傍所存なり且又強てお招き有るも別段お興も成る共覺へせ又横合のら某一の申出る傍失禮あるが斯く云ふ拙者も傍免じ有りて彼の傍婦人を召るる傍止り有て然る可く平は聞濟給はれと

(九十四)

逃るを聞より件んの武士の左門之助を取圍み己れ何國の者あるの未だ青二才の分として留置爲そこを片腹痛し此奴を先へ息の根留よと辨き立は其餘の者も瘦浪人ら討取と一度は咄と立擲り理非を辨せぬ無法の舉動早是非なしと宮本の前よ進みし一人の利腕擔ひて投出し又も右手より握み懸ると早速の當身よ打倒せは残りの族の一同は刀の鞘を拂ふと見へし前後左右の差別なく斬込來るを物共せせ白刃の下を甲斐潜り手玉の如く投除る其眞捷は怖れしや七八人の若侍ひの始めの勢ひ何處へやら逃るもあれは罷るも有りて忽ち其場を鎮りけるよ左門之助の形を既め残りし武士は打向ひ尙ほ將來を警戒て其儘放ち免しける此時娘親子の者も蘇生する心地して二個諸共進み出両手を着頭を下良人の氏名且に又其身の名とも打明し實に今日天満宮へ參詣し其歸り路の今の大難危ふき處をお救ひ下され何をお禮のや左右や無く何れ邸宅へ歸りし上良人は委細申聞早速再生の傍恩をば必報ひ奉らん何卒何れの傍藩士あるや傍姓名をば伺ひ度と述るを聞て宮本の莞爾と計り打笑這い又存外のお詞なり某し一時傍難儀をお救ひし上れは迎争る傍禮を受可きや且小生も浪士の身の上居所も定らぬ者なればお心遣ひ決して傍無用其傍言を戴く上の此上は餘るお志素し斯く云ふ内よ若し今の無法者らお來も致さば又傍難儀の有るやも知れせ我等も少しもお構ひ無くお歸りあれと言ながら其身も料理の價ひを濟せ早立出ん跡を仰せ聞られ度と只管請ふて是非も無く然らば杯の包みやさん石州津和野の浪士よて宮本左門之助と申者斯く姓名を申上れば最早傍用も傍座るまじ傍縁の有らば又此後傍面會よ及ぶべしお免しあれと言樂て其家を竟し立出けり又も續て親子の者思はぬ時刻を移せしと料理の價茶代まで心を附て拂ひを濟せ表の方へ立出れば早宮本の陰さへ見へせ此時母の娘女よ向ひ思ひも寄らぬ大

難を遭れて無事歸れるも宮本殿の在さむ和女の勿論妾まで如何ある愛目を見る事の知れぬ
火急の難儀をも救はせられし禮さへ緩々聞も入られぬ且又お年も若くして武勇の優れ給ひし
井々あらぬ腕前多姓名こそ伺ひたれ共お宿所まで明されぬ又今更の様なれ共竊もお後を付
て往見届おれば幾重も充分禮も爲す可き夫さへ迂濶よせざりし妾おつらも過てり其方
の如何と思ふぞと娘の方を見返れば娘も尙更宮本の姿優しき耳も其身の難を救ひる命の
親共謂つ可く且亦優れ腕前も前此恐怖も打忘れ慢身も染戀風の早春心さへ覺へし悟られま
じと側へ寄り多意遊はさる如くよてお宿を伺ひ置たなら父上様と諸共もお禮よ上る事も出来お
招き中事もなり多恩報じも遊はされんよお残り惜き事ありと路々互ひも語り合邸宅へこそ歸
りける借宮本の此年秋の末迄も近き諸侯の城下も到り敵跡を探れ共更も手懸りも非せりて
亦い江戸も立歸り竟も年を越て承應元年正月と相成始めの風邪の心地とて打臥るる漸次も病
ひの重り來て醫藥の効驗も無き耳か自分おつらも危篤を覺へ最早此儘死とるか覺悟を究めて
居たりし神の救はせ給ひし者よや數人の醫師も見放しある其病ひを日々も元へ復して遂も
此年五月の初め全快致せし事なれば宮本の悦ひ大方も全くと天神の救はせられしと自ら信じ
猶も誠心を凝して祈念を込六月中旬も至りて江戸を立出此より與羽の兩國を探らる若しや鈴木
ても一二を争ふ至つて手廣き旅籠屋あるよ左門之助も宿と定め逗留致せし其日の事隣り敷の
三個の力士の旅興行の返りと見へ皆口々も取組の物語り杯爲しおつら酒宴を設て居りし折し
も揉療治をば業と爲し山脇左一と呼者よて力自慢の男が來りお關取よのお療治の活用も如何と
云ながら酒宴の席も入來れば力士の斯くも聞よりも然り免もあれ試みよ肩の當りを揉て賢はん

力の限り揉せんば我等の體も効まじと脊を差向て扣へたり左一は忽ち諸手を揉肩の附より左右
の腕と漸次も諸方を揉おつらお關取の體でも私に療治此一手を以て脊筋を強く撞ものなら堪へ
て居らるし事の成るまじ夫共堪へて居給ふと思ひも寄らぬ詞を聞き力士の莞爾と打笑ひ何程
療治の術もても私等が體の見らるる如く磐石程も練へも身軀假令如何ある術も知らぬとお主位
の腕首もて力に限り撞ば進堪へられざる様もて天下の力士と言れんや萬一堪へぬ其時五
兩の金をお主に進せん堪へも時ハ療治の代も掛ひを爲ぬが承知かと言れて此方も打笑如何も
承知仕つれり然らば關取撞はどに堪へせ聲を出されも五兩の金を下されよと堅く約束を相固
め脊筋を暫時揉居たりしお頼て左一の力を込矢聲と共に撞たれば力士の痛さよ堪り兼噫と叫ん
て倒るし計り此時左一の約束なりと五兩の金を受納めり此体を見て傍らある二個の力士ハ打笑
吾こそ堪へて療治をば無代で揉して遣らん走者と替るくよ脊を出し最初の如く撞せし何れ
も堪へせ叫ひしよ仕て遣つたりと左一の悦び都合十五兩の金をば掠め徐々此場を立出るり三個
此力士ハ呆れ果唯茫然として居たる耳此なる様子を最前より隣り座敷で宮本の始終の体を偵ひ
居しお餘りと云ば彼奴こそ如何ある者お知らぬ共斯る所業を爲す事憎し率某しの試して見んと
左一此廊下へ出るを呼入我等も療治を多依頼さん且又力士三人迄堪へられざる術と云ふも是
又試して撞て見られし隣り座敷の客の如く堪へ兼ある其時ハ同く五兩を出すべし如何よと言れ
て左一の悦び又心中も想ふやう斯る柔弱の身を以て心太くも言し者おな先其儀なら飽迄も懲し
て吳んと打點頭又い宮本の脊を揉さげ脊筋の左右を撫さそれり此時力士三人ハ各自金を奪はれ
しに無念と思ふ折柄おれば三個諸共廊下も立出片唾を飲て備ふたり又宮本の小松の發より傳授
されたる柔術の身固の法を以て呼吸を定め待との知らぬ山脇が力を込て撞けるよ不測や恰も居

(三十五)

厭居く自若と做して居たるよど又も再三方の限り槍共押共驚く体あり這り口惜と立上り諸手を掛て綱と見へし三間計り投出せり左門之助の投られ乍ら中よて疾くも起直り閃りと立て冷笑汝ぢ未熟の腕前よて斯る所業を爲そ事憎し最早頭の無き者なり首の廻りを改め見よと言れて不審と思へ共何心なく探りて見れば小柄を以て襟元を縫留てこと有りけるよ其勁捷は驚きたれ共不敵の者も恐る体無く又い搦懸るをば左門之助の搦て伏宛然磐石にて押へし如く身動きもみらねば嚙を做し悶へ苦む体なるよ宮本の聊の手を弛め尙此よても服さば五臓を未塵と爲そ可きぞ如何よと言れて今更一言半句も有ばこそ首を疊に擗着て小生未熟の腕を持重ねくの無禮を盡し何とお詫の詞も侈座無く何卒免下され度私し事ハ土州浪人山邊大之進と申す者にて斯く按腹を業と做し諸國を廻るも全くの仇を尋る身は上るれよ己よ本國を立去て十一年よ及べ共未だ敵の踪跡も知れ空く光陰を送る内身よ貯へし路用の費一據無く斯の仕合寔は恥入次第かり迎打漏れて物語る始終の様子を聞取て我身の上よ引競べ漫然と憐を催ふして又大之進に打向ひ我等も諸國を経廻りて同く仇を索る者あり幸ひ拙者の路用も盡せ今日迄に罷在る就ては先刻力士の衆より得られぬ金を返さる可し其代りとして某し之を貴殿よ進せんと金拾両を取出し受納てと勸るよ力士の者への金子を戻し又宮本の勸めもる金を再三否め共露返されて己むを得せ大之進の厚意を謝し竟るよ金を受納めり

第十一回

獵夫宮本よ會して敵の居所を告
宮本岩淵山中よ山賊を殺す

諸も宮本左門之助の思ひも寄らば旅宿よ於て山邊大之進の履歷を聞くよ早十一年を過せ共未だ敵の手懸りも非せと聞世よ薄命の者迎ひ我身計りと思ひの外我より皇霜を繋るよ又氣の毒も身

(三十五)

の上と歎息あして尙更よ其の事共問ひも爲れ問はれも爲して其夜を越し又の對面を約し竟る同所を立出此日原市驛よ一泊し次の日日光山よ上り遙く神君を伏拜み武運を祈りて神殿及び社頭の景色見る者をして眼を驚し善美を極めし紙筆よ盡と事も能はせ尙ほ神君の侈武徳を追賞し其より中禪寺の庭内の勿論裏見ヶ瀬冷泉地を一見し光陰を累ねて奥羽兩國を往來し鈴木の方を探れ共更に手掛りも得ざるより此年十二月に至り再度江戸よ立返り又年を越て承應二年正月とこそ相成龜戸村ある天満宮へ參詣せんと朝早くより旅宿を立出四方の景色を詠めつゝ餘念も無くして往掛る向ふの方より來りし武士往過ながら振返り若しや貴君の宮本様の左門之助様てり座らぬると聲掛られて立止り又誰なるものと面を見れば先年奥州北劔山よて一命をさへ救はれもる獵人大作よて在ければ此はと計り打驚き如何致して江戸表へ出府致せられし耳ならんて武家奉公を致されしや何の鬼もはれ此の市中幸ひ向ふの茶店に至り緩々其後の事共を物語らんと同道し一別以來の挨拶も互ひよ述べて順ての事又宮本の尋るやう當時の何れへ仕官をせしや定めて都合の宜きある可し我等の阿州を去し後貫所の詞よ隨ひて播州姫路よ到りし處敵鈴木ハ居らばして妖狐の爲よ誑めされ種々の難儀を爲し事より奥羽の諸國を歴廻れ共未だ行方の知ざる趣き挿摘んで物語れば大作の驚き大方あらん私し事ハ強ちよ武家奉公を好まじならぬと又止難き事故ありて遂に阿州家の足輕の奉公住の致したるれ共其跡の隙と云ふ迄よ却て手馴た獵師の方の遙く増かど存知ますれ共今更是非無く今日まで勤め續て居る耳よ故よ斯く繁昌の江戸表を思ひ掛なり見物致しませる事ハ仕合と一個て存知て居る耳と互よ盡ぬ物語り其内酒肴も來りしよ二個の此にて酒宴を設け尙ほ兎よ角と餘念も無く過し事杯語りて居しと思はせ大作の横手を拍此頃私よの同僚よて加州の人と懇意の者あり互互ひよ往來もする又其者の咄しよの近き頃加

厭居く自若と做して居たるよど又も再三方の限り槍共押共驚く体あり這の口惜と立上り諸手を掛て欄と見へし三間計り投出せり左門之助の投られ乍ら中よて疾くも起直り閃りと立て冷笑汝ぢ未熟の腕前よて斯る所業を爲と事憎し最早頭の無き者なり首の廻りを改め見よと言れて不審と思へ共何心なく探りて見れば小柄を以て襟元を縫留てこそ有りけるよ其勁捷な驚きたれ共不敵の者も恐る体無く又も掴懸るをば左門之助の搥て伏宛然磐石にて押へし如く身動きもあらねば嘴を做し悶へ苦む体なるよ宮本の聊の手を弛め尙此よても服させば五臓を未塵と爲と可きぞ如何よと言れて今更一言半句も有ばこそ首を疊に摺着て小生未熟の腕を持重ねくの無禮を盡し何とお詫の詞も傍座無く何卒免下され度私し事の土州浪人山邊大之進とす者にて斯く披腹を業と做し諸國を廻るも全くの仇を尋る身は上るれよ己よ本國を立去て十一年よ及べ共未だ敵の踪跡も知れ空く光陰を送る内身よ時へ一路用の費し據無く斯の仕合寔に恥入次第あり迎打測れて物語る始終の様子を聞取て我身の上よ引競べ漫然と憐を催ふして又大之進に打向ひ我等も諸國を經廻りて同く仇を索る者あり幸ひ拙者の路用も盡せ今日迄の罷在る就ての先刻力士の衆より得られぬ金を返さる可し其代りとして某しむ之を貴殿に進せんと金拾両を取出し受納てと勸るよ力士の者への金子を戻し又宮本の勸めぬる金を再三否め共押返されて已むを得老大之進の厚意を謝し竟るよ金を受納めり

第十一回

獵夫宮本よ會して敵の居所を告
宮本岩淵山中よ山蛟を殺と

儲も宮本左門之助の思ひも寄らせ旅宿よ於て山邊大之進の履歴を聞くと早十一年を過せ共未だ敵の手懸りも非せと聞世よ薄命の者迎ひ我身計りと思ひの外我より星霜を累るよ又氣の毒も身

の上と歎息おして尙更よ其余の事共問ひも爲れ問はれも爲して其夜を越し又の對面を約し竟る同所を立出此日原市驛よ一泊し次の日日光山よ上り遙し神君を伏拜み武運を祈りて神殿及び社頭の景色見る者をして眼を驚し善美を極めし紙筆よ盡と事も能はせ尙ほ神君の傍武徳を追賞し其より中禪寺の庭内の勿論裏見ヶ瀬冷泉地を一見し光陰を累ねて奥羽兩國を往來し鈴木の行方を探れ共更に手掛りも得ざるより此年十二月に至り再度江戸よ立返り又年を越て承應二年正月とこそ相成龜戸村ある天満宮へ參詣せんと朝早くより旅宿を立出四方の景色を詠めつゝ餘念も無くして往掛る向ふの方より來りし武士往過ながら振り返り若しや貴君の宮本様の左門之助様てい座らぬと聲掛られて立止り又誰なるものと面を見れば先年奥州北劔山よて一命をさへ救はれぬる獵人大作よて在ければ此はと計り打驚き如何致して江戸表へ出府致せられし耳ならぞ武家奉公を致されしや何の兎もぬれ此の市中幸ひ向ふの茶店に至り緩々其後の事共を物語らんと同道し一別以來の挨拶も互ひよ述べて頼ての事又宮本の尋るやう當時の何れへ仕官をせしや定めて都合の宜きある可し我等の阿州を去し後貫所の詞よ隨ひて播州姫路よ到りし處敵鈴木の居らせして妖狐の爲よ誑めされ種々の難儀を爲し事より奥羽の諸國を歷廻れ共未だ行方の知ざる趣き搔摘んで物語れば大作の驚き大方からせ私し事強ちよ武家奉公を好しならねど又止難き事故ありて遂に阿州家の足輕の奉公住の致したるれ共其跡の隙と云ふ迄よて却て手馴た獵師の方の遙よ増かど存知ますれ共今更是非無く今日まで勤め續て居る耳と互よ盡ぬ物語り其内酒肴も來りし思ひ掛なり見物致しませる事の仕合と一個て存知て居る耳と互よ盡ぬ物語り其内酒肴も來りしよ二個の此にて酒宴を設け尙ほ兎よ角と餘念も無く過し事杯語りて居しと思はせ大作の横手を拍此頃私の同僚よて加州の人と懇意の者あり屢互ひよ往來もせよ又其者の咄しよの近き頃加

(四十五) 賀家又仕へ一者の一刀流の達人とかよて鈴木源五兵衛と名乗よし其年齢をも尋し凡そ似寄し様子もゆ望れば若し源藏の改名して住込なるやも圖られを免も角と探りあるべしと聞より宮本の飛立計り遣ひ有難し悉くけし必老其奴に疑ひ無く我等も於ても關東及び奥羽の諸國を探れ共更手掛りを得ざりしと一度ならせ二度迄も貴所北報知預りて鈴木の方の知れると云ふも是又奇ある事ありと再三再四深く謝し又の面會を互ひに約し此日の遂も別れける其より宮本の龜戸村に到り宰府天滿宮を九拜し何卒敵を討しめ給へと一身不乱し祈誓を込一七日の間水垢離を取て行を爲し其満願も及ぶの曉き衣冠正き一個の老人何國共なく現れ出善哉如何も宮本其方の索る仇たる者の當時北越の先もあれ共當年彼の地へ到る時必老三度の大難あり且其方の身も取て廿五才の厄ある耳の八方塞りも當るを以て必老北國へ趣く可からを若し又此を破るよ於て九死も及ぶ災害あるなり未だ時運の來たらねば身を慎みて在るべしと再三告しめ給ふと思へ此曉きの夢あるよ左門之助の奇なるを覺へ一箇熟々以爲先は阿州の足代山よて小松翁の警戒らしも今此夢と符合爲つれば我身に取て敵事あらんる假令廿五才の厄年なり逆仇たる者を討んと云ふ我精神を憐れ給は凶事も變じて吉事と爲し首尾能敵を討しめ給へ仇の手懸得る上の一あり共安穩も争か差惜事の能はん唯此上の一命を天よ任せて彼の地よ赴き探し出さて置べきと尙ほ天滿宮を伏拜し江戸を立山宮本の中仙道輕井澤まで來りしよ是より近き間道あり逆旅人の敵へは隨ひて道を轉じて急きよ如何せしよや不思議も大ひよ路を踏迷ひ信州淺間山の麓間近く來り字岩淵と稱へたる最凄然深山の其谷合の細道へ踏入たる此處の別て樹木の生茂り白晝と雖も薄暗く木樵の者の折は觸此山中を往來はそれと旅人の通ふ路を樹木の枯枝の横はり松の落葉も路を埋め寂々たる間道あるよ左門之助も呆れ果て問はんよ

も人陰なく須臾イみて茫然たりしが斯て果しと氣と焦燥尙ほも小道と思しき處を足よ任せて歩行しよ岩間を傳ふて流れ出る清水を溜たる凹みし所を今往過んと爲て折折走り出たる怪の物の宮本目懸て飛懸るよ心得ありと身を替し抜より早く斬付たるの深く刀の立ぬと見へ更も弱し体も無益々益々狂く荒回る其疾さ譬へん様を左門之助も一生懸命飛違へて挑みし内に忽ち毒氣を受し者よ俄然も手足へ瘰癧を生じ動き自由を得ざるより這り又如何せし事か此場に於て流なば此なる怪物も取喰はれん残念ありと噛を爲と亦如奈ともする能は老躊躇隙の有りし者よや急き怪物の飛懸り倒るる處を口よ咬へ引摺るがら洞穴へ已入らんと爲す折しも不思議や今迄宮本の五臓の瘰癧も動き得ざるも心氣憤然として我に返り勇氣十倍増せし持たる刀を取直し腹と覺へ其處へ柄も拳も貫徹よと突上たる堪へ得ざ咬へし儘も猛り狂ふを處擇まを刺貫けば竟も弱りて倒れける宮本足下も踏て亦も數ヶ所刺貫き漸やく仕留て吐息を繼ぎ引摺出して改むれば口よ尖りて細長く全肺は鱗の金色を現はし其体魚類よて四足あり其大ひある事頭尾よ至つて八尺餘り左門之助も驚く耳よて如何あるを辨へて須臾見詰て居るし亦も情々考ふるよ此山嶽とか云ふ者ならんと尙蹴返して打眺め已も其場を去んと其時谷間の流も當り何やら物音致すよぞ不思議の事よと宮本の四邊に眼を配る間も無く亦一匹の山嶽の五六才ある小兒を咬へ此所へと駈來しよ左門之助の飛掛り何の苦も無く打留て手疾く小兒を抱き上身内を見れと疵も無く氣絶致して居るよ付準備の奇薬を取出し清水を汲て飲しむれば其藥効の著しく忽ち蘇生爲したれ共何れの者やら相分ら居所姓名を問はんよも幼稚の物也へ辨へて只泣叫ぶ耳なれば途方よ異て宮本の今更見察る事も能はと抱上し儘に居しよ獨り熟々以爲斯く深山の谷間と雖も咬へて來る所を見れば必老近きよ人家の有ん定めし此兒の親達の氣も半乱の如くよて無か

(天十五) 索つて居るなるべし、惘然の事よと思へ共今更行方の道さへ知れぬば只茫然とすむのこ此時數多の人々の獵人跡の物を先立手よく竹筒を握るも有り或は鋤鉞鎌を各自携へて駆來り左門之助を見るよりも互ひよ面を見合せて猶豫跡の見へければ大音上て宮本の有りし順序を物語り抱きし小兒を指示せば何れも安堵の思ひを爲し側より來り一人夫へ進み出私事岩鼻村比農夫嘉右衛門と云ふ者夫成童兒の子息とて山賊の爲め奪ひ取れ所詮死骸も得られせと覺悟の致せと迫ての事山賊を退治て敵を討んと俄に村の多勢を依頼此深山へ入來し處思ひも寄らせ子息よの再生の恩を蒙りし禮の詞も盡されと嬉し涙を押し拭ひ左門之助より小兒を請取身内は疵も有んと改め見れど格別の怪我さへ無き嘉右衛門の尙ほ嬉しく飛立計り亦此處へ集ひし物の山賊の斃れし状況は何れも恐怖爲と耳の亦宮本の凡人あらぬを語り大地は何れも平伏して神の如く尊敬し此より岩鼻村へ伴ひ嘉右衛門へ云ふも更なり所の農夫一同集り皆口々に深く謝し只管逗留を勤むれど僅る一日



此處より留り同所を立田宮本の村一同の人々の案内に隨ひ再度中仙道に出れば此より見送りの者も別れ同國嶽捨山の古來よりの名所あれば兎も角一見爲さばやま又山道を轉して急ぎ一か山賊を退治せし時受ふる毒氣の残りし者もや手足へ又も瘡を生し歩行の自由は任せぬ者ら旅泊も於て治療を加へ空く光陰を送りて竟は九月の中旬に至り漸く全快致せしよそ嶽捨山をも一見し夫より尙も名所古跡の多ければ残らせ見物爲さんとせしと思ひ返して考ふれば我仇討の身を以て餘事の名地を探ると云ふは我等が自ら悔て路を横切村井瀧原打過て惣尻驛へ出けるが此より順序は驛路を累ね奈良井殿原の間より右へと切飛驒高山をさして趣きける

第十二回

豪商力士暗日根峠は賊難逢ふ
左門之助強賊を討て衆人を助る

(天十五) 賊々たる峯や谷川も幾重か越て今此よ長の光陰を打過し主従九人の旅の者四方の氣色を詠めつる名所古跡の事共を互ひよ語り囁き合打戯れて泊りをも急かぬ旅の人々の當時加州の内よても二と呼れし豪商人油屋忠兵衛と云ふ者あるよ一人處女の花を運手代喜兵衛よ若者出入の力士を三人と此外物持二人を隨へ大和巡りの返り路はや本國よも遠らねば緩々國へ歸らんと氣儘よ歩行來りしよ飛驒と加賀との國界に至て嶽き山嶺は樹木の梢の繁茂して白晝さへ暗き木下闇當時開日根峠と呼て往來の旅人も最稀よ別て毎日黄昏よの山賊共の現れ出往來の者を奪ふよし其層さへ高けれを這の全くの事共思す油屋忠兵衛親子の者并は力士等諸共よ山の麓へ差掛れ旅人ど見るより旅籠屋の男女の夫へ走り出是非よお宿を願ひ度殊よの折々山賊此出る咄しも沙塵り升れば早くお泊り遊ばせと替るよ、よ勸るより娘お花と忠兵衛も旅宿の勸めよ隨ひて已よ泊りよ就んとす此時力士三個の者片類は笑を合まつし其場へ進みて云るやう未だ時刻も早くして

お泊り爲るよ及びやさき且又賊等の十人や二十人の出れば迎私し共の三人がお側は従ひ在るゝら山賊共を打懲し旅人の害を除く可しと心遣ひり涉無用と左も潔よく述ける中よも三保松清五郎の一層勇み進み出小賊共の出るよも未だ日も高き事なれば此ある嶺をお越なされよ又假りよも私し共の天下の力士と呼ぶ者賊の出ると聞よりも泊り一杯と後日よ至り多く此力士よ云れて何面目の汚座る可き若し盜賊の出るよ於て何頃の力を現はして一人残らせ打殺し旅人の害を拂ふ可し必心配遊ばされ私共の勤くを片邊よ於て汚覽せられよ聊か氣遣を爲給ふなと一個の言ば其余の二人も三保松よ心を添是非く峠をお越めされよ左すれば翌日の泊りも宜しと頻りよ勧め立られて然らば斯く迄力士の衆を受合下さる事あれば少しも恐怖事も無し娘よ心配致みと氣を勵して忠兵衛の小休させし茶代を與へ旅宿の主人男女の者の留るを聞せ打連立峠をさして上りける已に二里余歩来り折柄はや日も西よ傾きて梢へを翹る小鳥さへ啼音も絶へて最寂しく谷間よ流る水音の又流々として凄然見通し難き山道あれば心細く思へ共今更後への戻られす早く峠を越さん者を急く折しも横合より現れ出る十四五人何れも異形此打拵て行方の路に立塞り路金の残らせ衣類まで命欲くば渡して仕まへ兎や角言の斬殺さんと藤柄巻の山刀皆一同よ抜放ち押取圍むと見るよりも三保松よ王手山岩戸川の三個の大口明て冷笑命知らせの山賊共余の旅人と事替り已れ等如きの出れば迎驚く様なる者よ非と望む處ぞ覺悟をせよと言つ力士の三人の手頃の松を根拔と爲し群り立たる山賊を右と左りへ打振羅立宛然仁王の荒たる如く無二無三よ打倒と其勇力よ當り難くや須臾賊等も戦ひしが右方左方よ逃亡ふり此働きを忠兵衛初め恐怖ながら詠めて居し賊徒の半死半生よて往方知れす成れば何れも安堵の思ひを爲し少しも早く此山を越さんと一同立上る折柄又もや數多の賊の再度

此處へ早寄たるよ前よ力士よ打立られ散乱おたる者共の斯くと注進致せし者よて又此山を極どおし賊の張本と仰がれもる福島左衛門太夫政則は漢人大山太郎照國とて力置願ぶる優れし耳の鎗術の奥儀を極めもる大膽不敵の曲者あるが今此處へ馳來り鎗取延て立向ひ能くも手下の者共を打懲したる其返報我手よ懸つて往生せよと聞より力士三個の高の知れたる賊徒の張本唯一打と勢ひ込三保松を始めとして大山太郎の左右より打て掛るを者共せせ宛然飛鳥の如くよて受つ流しつ遇ひしが一聲叫んで飛込様は槍の石突把直し突よと見へし三保松の急所を撞れ氣絶致して倒れける此を見るより二人の力士の眼前の敵遣しはせじと益々力量を顯し一心不乱よ戦へ共大山太郎の賊ながら武術よ優れし者あれば何の以て堪る可き王手山久太郎岩戸川浪之助も共よ急所を突れしより眼眩みて齒を喰しめ患の根留て倒れり照國莞爾と打笑腕立致し此奴を一時氣絶を爲しめれば最早妨げ爲と者非と者共來れと云ながら徐々步行近附よ忠兵衛始め其余の人々杖柱とも頼たる力士三人が倒れし何れも生たる心地も無く齒の根も合を踏まり両手を合して伏拜み震へ慄く計りあり此時大山太郎よ於て娘お花を見るよりも手下の者よ差圖を爲し疾く岩屋よ連行べし我等が妾よ到さんと泣居る娘を抱上させ拘引行ん休あるよ忠兵衛我身も打忘れ小賊共へ絶り付所持の金錢衣類まで差上まそハ厭はねと娘計りのお免われ慈悲じや情じや拜み升ると取絶る迎聞ばこそ命知らせ山賊等の悲命を發して泣叫ぶ娘お花を擔ぎ上情け用捨も荒鷲よ捕へられたる小鳥の如く岩屋をさして連行れり忠兵衛今の氣も狂ひ心も亂れし如くよて娘の後を追はんと爲とを大山太郎の引留め諦めの無き此の老朽如何ほど歎き吐くよとて爰ぞ再度返さんや其より所持の金錢を殘らせ此よ出す可し命計りの助て遣らんと云つ忠兵衛を縛り上又も片邊よ伏轉ぶ手代喜兵衛よ若者物持までも縛めて路金を入し行李の更あり而

悪其他の手荷物まで手下の者よ擔がせむのら己も其場を去んとせしに思ひ返して立留り此奴の
並の賈人ならせと最前よりして見留りの此なる行李此印を見れば加州家の用達油屋忠兵衛と覺
へたり此輩れを生して返さば必ぞ加州へ訴へ出ん然る時よの金澤より捕手の人数を向るの必定
憫然るがらも斬殺し後日の憂を除かんと又も徐々立戻り手下の賊等に付首打刻よと下知なせ
ば兎共見紛ふ荒男四五人夫へ走り寄り藤柄卷の山刀拔と見るより忠兵衛の身を震はして泣叫び
蹠蹠あゝて打歎き此儘お放ち有る逆も決して他言の致さぬ故も命計りの助あれと聲を震はし
身を悶へ又通れんとも縛めの繩を掛りて繋られたれば白刃の首も臨むをば待より外よあらざりけ
る大山太郎の此を見て大口明て冷笑いつ吐きつ叫べば逆生置難き奴あれば念佛すて往生せよ其
代りよの娘を此の照國の妾と爲し長く寵愛致して遣はし是を冥途の土産と聞て淨佛せよと罵
りつゝ手下の賊へ目配あそよ其意を悟りて小賊共の新身の剛刀振あさそ身も白刃の下よ居て最
早忠兵衛の一命の夜明も残れる燈火の風を待つより尙ほ危ふし却説宮本左門之助の飛驒の高山
も何時か過き暗日根嶺へ行掛れば旅人と見るより旅籠屋の主人の其處へ馳出し且那樣よ此山
を今おらお越しおらんより今宵のお宿を願ひ度は是非よと請はれて今更急がぬ旅の事なれば左
門之助の立留り然らば一夜のお世話も成らんと云つゝ此家の座頭も腰打懸た折柄よ主人の又も
側へと來り最前加州家の用達油屋忠兵衛とよさるる人ぶ都合九八のお連よてお休息あされ
事あれば嶺へ賊の出る趣きを知らせや上もれ共お連の内なる力士の衆の山賊杯の出れば逆少
も恐るゝ事も無し未だ日も高き事ゆゑよ山を越さんと勸められ竟よお立なされしが定めし急度
今頃多の賊も取圍まれ難溢せられて浮座るべし且那樣よのお泊りよて明日緩々お立てわれ
ば浮氣遣ひの浮座りませせと咄せも世辞の一つあり斯くと聞より宮本の主人よ向つて云るやう

開ハ又容易あらざる事なり我聞せんば兎も魚も聞ある上に乗置れど力士の身分を以てさへ賊の
出ると聞よりも勸めて出立致せと云ふの實よ見上た精神なり我等此より追付て萬一賊等も圍れ
居らば助けて遣さんと立上り茶代を其處よ投與へ後とも見せよ馳出し間日根峠の絶頂目掛息を
も繼ぎ上りて來しよ谷間よ中りて泣叫ぶ女の聲を聞よ否諸こそ賊等の手よ捕れ難儀致して居る
者ならん猶豫のあらじと宮本の聲を知るべし馳下れの小賊共の花を擔ぎ岩屋の方へ行んと爲
そ其形勢を見るよりも走り掛つて打殺し手向ふ者を右左り手玉の如く投出せり不意を打れて賊
徒等の皆散々よ逃亡たり左門之助の泣伏る娘お花を抱起し最早恐るゝ事ハ無し連の者等ハ何
れにあるや様子ハ如何にと問ひ掛られ涙あがらよ云々と物語るをば聞よりも左門之助の娘を抱
へ取て返し嶺の絶頂汝ぢ恐怖も須臾の間此處よ潜みて待居よと生茂りよる熊笹の中よお花を
匿し置尙ほ一散よ馳來り遙向ふを見渡せば已よ油屋忠兵衛の後へ廻りし小賊の首を刎んと爲そ
体よ馳付隙もあらざれば手頃の石を取より疾く覗ひ外さぬ早速の眼潰し不意を撃れて眩まき後
へと堂と倒れける此間に透さよ飛込來り矢庭よ一個を斬倒す其動捷よ恐れしや小賊共の躊躇ふ体
よ大山太郎の現れ出已れの何國の者の知らねど能も妨げ致したり我手に掛つて死亡と鎗取延て
突掛るよ心得たりと宮本の松の古木を楯よ取り憎き賊首の廣言のあ我こそ天よあり替り汝ぢの
首を討落さん覺悟よ及べと云ながら頭上を目標て斬付る鋭き太刀を搔潜り焦て突出す鎗先を受
つ流しつ秘術を盡し一上一下虚々實々互ひよ劣らぬ手練の勁捷刃を交る形勢ハ宛然電光石火の
如く人交もせせ強ひしよ大山太郎のまよと屈せよ突立來る手練の精妙流石は宮本左門之助も
次序よ太刀先乱るゝ耳か其鎗先を受兼て後へくと突立られ已よ危ふくありければ這ハ口惜や
此奴の爲よて果敢あき最期を遂るると思へば尙ほ更氣力も衰へあはや斯よと見へける折柄不興

(二十六) 驟や响と吹起る風を避んと振向ふ後の平地の松山あるは此風竟と馳入ける通一のせじと照國も
 續いて追掛来りしは仕濟しなりと振返り勢ひ込て立向へハ賊首も大喝一聲叫び七離七合戦ひし
 の鎗此石突木毎支へ働き自由を得ざるより切の彼奴の謀計は釣込れたか遺憾と悔れど猶豫の
 有ざれば茲を先途と戦へ共勇氣挫て鎗先乱れ自ら後へ退くも得たりや應と宮本の付込断立
 る其太刀先の鋭さよ避んと爲して不圖も松の根方足躓き倒るゝ處を透さず飛込左りの腕を斬
 落せり切れぬがらも強氣の賊魁起んと爲とを首討落し尙ほ前後も眼を配れと最早逃亡なる者
 の殘賊一人も見へざれば刀の血を拭拭ひ鞘に藏めて宮本の忠兵衛初め其餘の者等が縛められた
 る繩を解片邊を見れば力士の三人仆れ伏て居るは驚き側へ立寄り改むれと身内は疵の非ととて
 全く氣絶と覺ゆるは替るゝ抱き起し活を入しは蘇生唯茫然として詞あし此時又も宮本の匿し
 置たる娘をも伴ひ来りて引渡せば忠兵衛親子の夢のと計り余りの事の嬉しさを我を忘れて取鎗
 り先立者の涙よて須臾詞も有ざりける漸くありて忠兵衛始め大地へ頭も擦付て誰君様は存知
 ませねどお助下され有難やと異口同音に述たる儘皆平伏て居るのみ左門之助ハ腰打屈め哇や
 何れも其様よ平伏せられて在る時の拙者よ於ても當惑致す最早賊等の居らざれば耳を氣遣ふ事
 ハ無し我等ハ最前籠よ於て其元達の事を聞き萬一賊徒よ取圍まれ難儀せられては座るゝらお救
 ひやさん其爲めよ急ぎて来りし甲斐ありて我等も満足致せりと詞静るゝ述ければ忠兵衛漸く頭
 を掻げ宿所姓名を打明し私し諸共九人の者命を茲に棄べき處一人残らせお助下されお禮のや盡
 され此此厚恩ハ死後までも誓つて忘却致しはせせと又も頭を地よつけて演る右より左りより
 伏つ拜みつ打悦ふも又道理と知られける此時忠兵衛ハ懐中より百両包みを取出し此ハ甚だ失禮
 なれ共珍覽の如く旅中の身の上當てのお禮のよ平よ受納下されと恐るゝ差出ると左門之



(四十六) 助の打笑ひ某し禮物を得ん爲よお救ひせし者ならせ小生逆も聊の路費の所持あり罷り在る
笑ふ謝物を受べきや心遣ひの無用あり早黄昏よ及びしなれば疾々此處を立去されよ若く又賊
等此來りもせよ由々敷大事と相成べし我等も此儘發足せん多縁もあらば又其内對面致しやべく
何れも去ばと立上るよ忠兵衛初め其餘の者俱し謝物を勸むれ共手よさへ觸ねば是非も無く唯平
伏て拜その中よも油屋忠兵衛の膝進ませして打向ひ追ての事よ多尊名を仰せ聞られ下され度と
只管請ふて止されの餘儀無く姓名を相名乗別れを告て立去りける

第十三回

宮本冤罪を受けて獄舎に繋る
奸吏私慾を眩して宮本を亡はんと謀る

山高と中央を埋む群雲は路急のれる雲催暗日根嶺を去りて後左門之助の旅宿の夜俄然大熱の
相發し其翌朝に至れ共發足すべき氣力も無く竟日數を累ねしが漸く本腹致せしよ此家を出立
あしたる頃冬の初めの日和癖とて雲の脚と見る儘は山風荒く時雨來て降み降を旅の空已
よ寒氣を受しよや又も持病の再發して歩行は自由あらね共苦痛を忍て漸々と金澤城下へ程近き
小清水村まで來りし折柄一層苦痛の愈増て最早一步も進まぬ耳の忽ち其處へ眩まき倒れ伏たる
此時は通り懸りし老人の居酒渡世の庄兵衛とて慈悲善根を心懸出さへ殺さぬ性質なるよ誰云ふ
と無く佛庄兵衛と呼さされ人よ知られし者あるが今不圖に宮本の倒れし体を見るよりも漸うよ
して脊負つて我家に伴ひ返りし上老の夫婦の一心よ醫師よ藥と駆廻り介抱致し誠心の届し者か
宮本の其翌朝よ及びてより漸く心氣我よ返り始めて此家よ伴はれ介抱受たる事をば悟り只管夫
婦の厚意を謝して此處よ日を累ぬる事余日よし及び漸く起居の自由あるよ至れ共未も氣力の衰
へて歩行をも心のならねば庄兵衛夫婦のまよと忠實よ能く仕へ晝夜を別るを看病し尙ほ此上

よも緩々とお心遣ひの遊ばさる養生の然るべし又何あり共所用の儀の多遠慮の無く仰せよと
替るよと慰むる夫婦の心に絆されて又も日數を重ねし内遂に霜月の初旬とあり本腹せしよあ
らね共大ひに氣力も盡ひぬれの日毎よ最寄を徘徊し若くや敵の手掛りを聞出すべき便宜もあ
と心を附て見廻る内或る日宮本の朝早く豫て庄兵衛より聞得たる近き名所を探らんと其處此處
と無く散歩して竟にの歸路を取違ひ夜半よ及んで漸々と庄兵衛方へ歸りて來しよ何やら家の群
集して物騒然体あるよ不審あがらも宮本の勝手の方より入らんと爲すよ待設けたる捕吏の多人
を問も無く左門之助を呼出し眼下よ睨て糾問やう其方何國の者よして又姓名を何とやや逐一
白狀致すべし已よ昨夜小清水村よて居酒渡世庄兵衛夫婦を切害し金子二十兩衣類六品を奪ひ取
し其方なしん汝ちの是よ庄兵衛方よ先頃中より世話あり逗留なして在し由其大恩を受あ
ぶら斯る大膽を働く人面獸心と謂つべし其天罰の眼前斯く召捕れらる上あらは如何ほど偽り
陳せる共争の免れおうせんや疾々白狀致すべし如何よと計り糾問せられ左門之助の頭をさげ出
所姓名を申述私し事仰せの如く庄兵衛夫婦の情を受漸く全快致せし者よて已よ出立すべかり
しを達て夫婦の留るよ隨ひ尙ほ逗留の致せし者の日々諸所を徘徊し殊よ昨日の夜半よ及び歸宿
致せし其折柄存知も寄らぬ冤罪をうけお召捕りの相成ぬれ共其場よ於て私し身よ聊も覺へ
の無き故中開きを致さんよも多捕吏の諸君よ有無をも問はせ縛められ多拘引よなりたるの私
しの所業ならざる証據よ所持の大小を多改め下さるべし且又庄兵衛夫婦の者を殺害致せし者あ
れば争か安閑として立戻るべき此邊を篤と多賢察下されなば拙者の所業よあらざるの直ちよ分
明仕つると詞爽やよ陳けるを軍次兵衛の聞答め汝ち斯く迄詞を工み犯せし罪を遁れん逆何ぞ

此儘免さんや如何も其方の大小よて怪き處の見へぬ共庄兵衛夫婦の受たる疵の出刃庖丁の類を以て突殺したる者ある由左れば刀脇差とも怪き事無き筈なり又殺害致せし者立戻るべき謂れ無き雖も其方所持の手荷物を残し置たる事もある其夜の内に立戻り持去んと致せしなるべし然る時よ其方が飽まで陳し偽る共す披きの相立難しと此日の入牢あさしけたり扱又原田の宮本を賊と見認て召捕せ帯たる両刀を取上て中身の勿論拵へ迄篤と改め詠るも皆尋常者ならねば獨り心と思ふやう渠の如何ある身分の者よて斯く名作の両刀を平常帯し在る者よや如何よも爲して我手よ入あば子々孫々の寶あるべし然りくと黙頭つゝ工夫を旋し有けるを折しも鈴木源吾兵衛の入来り少しく願ひの事ありて參上致せし趣きを申入し軍次兵衛の直様奥の一室よ通し鈴木氏よの夜よ入て如何ある御用の有りしよや具よ仰せ聞られよ拙者の愚息の餘人と替り別段御指南を受るも何のお禮も致さんと心よ存せる折なれば決して遠慮に及ばぬ間願ひと云ふの何事あるの家族の者も居らざれば傍よ氣遣ひ爲給ふると心有り氣を聞き源吾兵衛の小膝を進め斯くお奉行のお詞よ小生大ひに有難し今更何をを裏隠さん實の先年私し石州津和野よ在る砌り宮本勘解由と申す者と武道の事より争論し竟に討果して立退し其奴の悍左門之助と云る者我等を敵と附覗ひ諸國を廻る趣きの疾よ承知を致せし先よ不圖途中よ於て渠を見當せしなれ共侍奴の拙者を見留せ併し御當家よ在るを知り尋ね来りし者おらんと夫より易き心無く去り迎聊か宮本を恐るし驛よの御座らねと訴へ出る事有りなば大ひよ名義を失はんとすそのみよ心痛し今日迄罷り在りし今更何君は御吟味あるの佛庄兵衛を殺害し金銀衣類を奪ひ一賊にて宮本左門之助とすよし承知致して取敢せお願ひすよ出あるなり何卒貴君のお見込よて拙者の安意致せやう御計ひを願ひ度此儘を聞辨給はる上の拙者の武術の

奥儀をも御賢息へ御傳授す御家中諸君の多しと雖も及ばぬ御手練よ必し御教授す上御恩顧を致さんと始終の事を打明し頼みを受けて軍治兵衛の莞爾と計り打笑如同よも其儀の承仰致せり貴殿の御安意あるやうよ急度計ひ申すべく其替りよの只今の御御言よ違ひ給ふかと互ひよ固く誓を爲し尙ほ兎よ角と兩人の數刻の間密議を遂夜陰よ及んで別れしと離れ知る者あらざりける其翌日と相成ければ原田の法庭へ出席し左門之助を呼出し如何よ宮本庄兵衛夫婦を殺害し金衣類を奪ひしなるべし今日白狀致せば手強き拷問に及ぶべし心を定めて立よと尖き料問を受たれ共身に寸毫も覺へぬ事よ奉行原田よ打向ひ已よ昨日も申上たる如くよて大恩人なる庄兵衛を争ひ殺害致すべき殺さぬ証據の留守中よ斯る變事の有り共知らせ戻りて来る處を以て拙者の身よ取り覺への無きを御賢察の程願はしくと陳るを聞より原田の憤り已れ大膽よも奉行よ向ひ不埒の言上よ及ぶ者よな汝の所爲て有る無きを吟味致せし職務なり如何ほど偽り陳る共欺かるよ某しからせ全く其方が殺害せし疾より見貫罷り在る白狀せよば言て見せん者共準備よ及べよと鋭き下知を受るより左右よ扣へし同心等の發と答へて宮本を木馬の上よ跨がらせ両足への大ひある二つの石を結付て前後へ數十度引廻しよ何かひ以て堪る可き聲の破れて血の流れ左右の足の抜るが如く然共聊か聲をも發せよ苦痛を堪へて言はねば原田の怒り烈火の如く眼を見張て憤り彼奴手弱き拷問よて容易白狀致すまじ今度石を抱せよと下知此詞も畢らぬも情用捨のあらばこそ又も多人數立掛り木馬の上より引下し替るよ宮本の膝よ數多の石を積前後よ於て揺動かせば如奈ぞ以て堪るべき下の小砂利を敷詰たる上よ座したる事なれば騙の未塵に崩るよ計り血の滾々として流れ出れど此又苦痛を忍びて一言も發せよ竟よはらんと仰反て氣絶致せば氣付を與へ蘇生致せば白狀せよと呵責よ達せよ宮本の身よ覺への無き

(七十六)

(六十六) 事ゆる假令此儘責殺されても坏て盜賊の汚名を受べき如何ほど拷問は擧る共冤罪の爲に刑せられんや殺さば殺せ責をば責よと心は誓ひて言はせ原田の日々用捨るく七日の間拷問致せしに早宮本の一命は今も消る計りなり此体を見て軍次兵衛の心の中と思ふやう今一度釣上なれば必死絶命致すべし然る時鈴木より頼の事も成就あり我取上し両刀も人知れせして手を入ること之兩端の計策ありと筋は獨り打悦び又翌日となる否左門之助を呼出し一層手荒き拷問せよと夫々用意をなさしめたり此時まで奥方の出頭田坂彌十郎も陪席し日々の吟味を詠めて居るが奉行原田の調へ方手荒の事を専らにし不審の事共多くして已に一言を發せんと思ひ詰て居るれ共何を云ふも上役ある奉行の權威は止むを得ず差扣へて在りけるが最早今日宮本を釣しの拷問は掛る時の必死絶命致すべし棄置れと心を決し原田に向ひて云るやう某がし不肖の身なれ共愚存を言上仕らん憚り多き事あらざる宮本の人品及び言語の様子を伺ふ處中々人を殺害し賊を働く者共思へと萬一外より賊の出なれば此奉行の越度より且又日々手荒き拷問のみをせらるる故身軀斯く迄瘦衰へ最早餘命の有り共存せざる内萬一の事有りし上渠の舊藩津和野より事實を糺して伊當家へ擧合れたる其時の容易あらざる事あるべし拷問のため殺しおは是も奉行のお恥辱あらざるや能く伊賢慮有り度と申陳るを聞よりも原田の大ひは怒色を現はし我等の假も奉行あり善惡邪正を糾すを以て我職務と致するあらは見認る處ある故に嚴重料問とぞ者あり然るを何ぞや其元より罪人宮本を冤罪と見儲け外は賊の有んとり以ての外ある所存あり且又舊藩津和野より彼是は越度とて恐るる事何のあらんや其上ならんは某の職務も就て越度のあらば割腹致し我心底吟味済し及ぶ迄決して口外爲給ふと氣色を變じて無法は云分彌十郎も呆

れ果心中大ひは怒りしるれが耐論するも無益の事と其後の厭してある程も原田の又も指揮を爲し疾く拷問し及べよと申渡せば酷吏等が最早生たる体も無き左門之助を縛り上左右の足よの重石を結付車仕掛て引上るるが前後へ風々揺動せせば骨の折肉も破る計りなり然共一言半句も發せぬ嚙りあして息もへたり夫と云ふより引下し氣付と與へて介抱爲さずも稍半時も心付を氣絶の儘よて有りければ仕済しなりと軍次兵衛の心の中は悦びける彌十郎の斯と見て自ら其場を馳出し醫師を招て諸とも介抱すれば宮本の命歟未だ盡さる者もや稍く有て眼を見開き又其儘も眼を閉て宛然死人の如くあり此体を見て彌十郎又も原田より打向ひ最早伊賢覽せられし如く此後手荒き拷問よて助るべく共存知やと唯此上の願ひより明日限私しへ吟味仰せ付られれば必死白状いふさせやさん平に聞濟給はるべしと思ひ込だる体なるも奉行原田の打笑某一日歟を費して拷問なせ共白状せぬを賞殿の一日糺さば迎争の罪も服可き望とらば兎も角も吟味いたして見らるべし明日罪も服さぬ時を裁割て鉛の熱湯を流し込假令絶命いたと共苦しおらねば其元も篤と心得置れよと最嚴の云渡し此日の退席いたしける

第十四回

義壯士獄舎に忍て宮本を論と
管神の靈現宮本の疑惑を解しむ

亦説く宮本左門之助の獄舎の柱に打凭れ最早生たる心地も無く假令此儘死する共坏る賊名を殘さんや翌日の鉛の熱湯を脊を裁割て流すとやら日毎苦痛を爲んより寧ろ死するが増しと思へは覺悟をいたせし者の敵も討得ぬ其前も冤罪は爲りて死るとい我ほど薄命は者もあるまじ思ふる此身の厭はねと未だ鈴木の安否も知らぬ果敢なき最期をみしおは草葉の蔭よて父上や其伯

父君の歎のせ給はん之を思へば死もあらず如何せばやと當代より一二と呼ぶる豪傑も奸吏の爲よ捕へられ悲歎も咽ふを憐れあり借て又田坂彌十郎の其身與力の出頭られ共奉行原田軍次兵衛とハ雲泥黑白の相違よして智勇も優れし武士あるる左門之助の無罪をさとり如何にもあして救ん者と心も思ふ處より原田は請ふて明日の自ら吟味よ及ぶるれ共一旦罪も服させせは助る道も無き者と種々よ心を碎きし夜半に至りて潜る獄舎の口よ來て見れば半番の者三人共はや消殘る火鉢を圍ふ震ひ凍へて居る程彌十郎の進み寄り半番の衆は苦勞と聲掛られて心附忽ち形を改むを其備よ及ばせと押し止め無る一寒氣の堪へ難かるべし我等の夜中見廻るも是又職務の事あれば各々方をもお察しす此の甚だ些少なれ共三個の衆よ進すれば寒さを凌ひて參られよ柳者ハ篤と宮本は疲れ一休を見届めれば後へ決して氣遣ふと深き情の詞よ悦ひ半番三個ハ平常より馴初酒屋に馳入て貰ひし金よて飽までも酒宴をなして居るりける却説田坂彌十郎ハ半番の者を遠避て心易しと唯一個獄舎の内よ入る否哇や宮本左門之助殿心を慥よ持しへ宮本氏と聲掛られ眠り居しよ有ね共氣力の疲れて横はり前後も知らず有りたるよ誰やら我名を呼ぶと思へし稍よして起直り出坂の面を見るよりも貴君ハ如何なる御用よて深夜を厭はせ給はぬ耳の此獄内へ移入來ありや死を決しぬる小生たれば少しも早我首を刎て苦痛を避るやう願ひ上ると云ふさへも秋の霜夜よ音を立し虫の聲より憐なる彌十郎ハ腰打屈め某し夜陰よ來りしハ貴殿の命を救ん爲罷り越たる者あれば決して疑ひ給ふ可あらせ全く冤罪と存知もあれ共奉行ならねは是非も無く差扣て居りたるれど明日罪も服されれば鉛の熱湯を脊よ流され必落命せらるべし一時賊名を受る共明日法庭よ出られなば殺害致せし趣きよ屹度服罪ささるべし然る時ハ當家の法よて再度獄舎よ移し替三十日を過されば所刑を爲ぬ掟なり此間よ拙者の心を碎き實

の盜賊を擄捕貫殿の冤罪を救ひやさん奉行原出ハ如何ある事よや拙者の諫を聞入せ日々手荒き拷問よ及び没命せらるを待つ体よて太だ不審の事共多く今更彼是討論なとも採用ゆべき者あらせ夫故切よ忍ひ來て我精心を打明し助命の手術を能く示し善惡邪正を飽迄も糺す我等の精心なれば一端罪も服する共一時の事も宮本氏必と翌日の服罪せられよ左も無き時ハ明日限り貴殿の命は無るべし我神佛に誓ひを込助命を謀る精心なり疑惑せられす某し詞を信じ給へよと再三再四返練し會得せしめて彌十郎ハ尙も彼も角示と折しも最前酒店よ到りる半番三個の返りて來し別れを告て立去ける後よて宮本左門之助ハ夢の計り打悦び斯まで左門之助を謀り給ふハ嬉しけれ共身よ聊の覺へ無くして殺害致と耳からせ金銀衣類を奪ひ一賊と諸人の口よ擄るも口惜又三十日の其内よ寔の賊の出ざる時ハ無論我身の所業とあり後世穢名を殘るハ必定夫より拷問ハ爲死を遂て苦痛を早く免れんと思ひ返して宮本ハ又ハ死せんと思悟をなせり然るよ時刻ハ順序よ移り丑滿する頃ありけん何國共るく梅花の薫り鼻を貫く如くよて不思議と思ふ間も有ぞ吐と吹來る風諸共に忽然として現れしハ此管神の靈あるる衣冠正き姿にて左門之助よ向はせ給ひ如何ハ宮本其方ハ驚き靈夢を受るがら其を破りし事よ依り今回の大難よ陥りたるあり未だ汝ちハ知らず有りしや已に一命を失ふべきハ山嶽の爲よ毒氣を受其場よ於て喰はれべきよ力を添て討たり亦其次ハ暗日根柢ハ賊首大山照國の鎗先よ懸りて死すべきを後の松山よ引入させ是亦首尾能討せしなり今當國に踏入て此大難を受ると云ふも自業自得の事ながら余リハ愍然と存ざる故今回の難をも救ひ遣を就てハ先刻其方よ堅く誓ひて立去し彌十郎の詞を信じ明日こそ其冤罪も陥よ自然と汝ちの一命ハ助る事よ至るべし我云ふ處よ隨はれば必命を失はん夢々疑ふ事勿れと宣ふ聲も爽かよ展々説諭せられしと思へば夢の覺よける余りの不思議と宮

(三十四) 本の只茫然と柱を凭れ亦熟々と考ふるよ今のの全く夢あるが最前態々來られしは儘も田坂彌十郎我一命を救ん爲り入來ありし趣きあるが彼是思ひ合はれば尤も奇怪の夢なれ共五臟も勞れを生せしより斯る夢をば見しならん心も留ま有りけるが尙又情々再考する夢中なむらも積郁ある梅花の香りを覺へ一耳か岩淵谷よて山巖を退治なしたる其時と暗日根柢も賊の張本大山太郎を敵手と取己ま危ふき折柄も救ひし事と夢ながら告させ給ふと覺れば左門之助の今更に疑ふ心も此又晴隱有難や勿体や某江都に在る砌り三度大難を受るといふ正敷靈夢を蒙りあがら破りし其罰を受もせぞ又も我身を憐み給ひ救はせ給ふ者あるかと落涙袖を浸すの如く夫より尙も宮本の天満宮を伏拜み待つ間も非ぞ何時もある其夜も明し事なれば奉行原田の早朝より彌十郎を出抜て其身一人出席し今日こそ其是非共ま拷問の爲絶命させんと腹ま工みし事あれば左門之助を呼出し唯一首の吟味もせせ鉛の熱湯を流さんと夫々用意を爲しめたり斯共知らせ彌十郎の出席致せば宮本の已ま拷問も罷んとする其形



(三十七) 勢を見るよりも原田の側へ進み寄り某も昨日願ひし如く今日の處の小生も吟吟味仰せ付らるべしと云棄も儘宮本の間近く進みて打向ひ其方此まで白狀致させ覺へ無きと申立てるも佛庄兵衛夫婦の者を殺害せしは相違あるまじ何はと偽り陳べる共所詮遣れぬ汝等の罪科疾く白狀し及ぶべしと云渡されて宮本の頭を掻いて面を見るも彌十郎も有りければ思はせ涙を浮べつゝ如何よも私し是迄の覺へ無き旨申上しつが斯かる上は是非も浮座無く逐一白狀致すべし全く庄兵衛夫婦を殺し金銀衣類を奪ひ取逃亡たれ共手荷物忘れし儘も立返り持去んと致せし處を浮召捕と相成て今更ら恐れ入り奉る唯此上の一日も早く如何ある嚴刑も處せられ度と竟も服罪ししむれば原田の悦び大方あらむ且又彌十郎も調ぶる間もかく忽ち罪も服せしを又怪しみのなしたれど白狀致せし事なれば直ちよ口書指印を濟せ直様溜りの囚獄へ移さんとのせしなれど獄舎も差支の有りたれば其儘措き竟に年を越し承應三年正月八日と相成ける却説當時名も高き三保松清五郎の弟子二人を供も連春興行の撲撲場へ急ぐ向ふの横町の往來も留る群集の人は何事あらんま立留り様子を聞は去年の冬小清水村の庄兵衛を殺しし賊の罪に陷柳小路の牢屋敷へ今送られて来るなりと事の次第を聞よりも三保松の弟子等も向ひ今日の出先も於て思しき事を聞く者もあわたくしの宜けれとお主等の出世前の體も囚人杯の見るなよと云聞あがら横町へ路を轉じて急しよ不思議や雪駄の前緒の切しよ縁起の悪いと吐きながら持たせし木履を脱替て進ぬ心を自ら脚しはや大通りへ出んと爲を曲り角にて不圖も最前遊たる囚人又もや確と行合て最早遊べき暇も有ぬは是非なく其處も立留れり此時數多の人々が前後を圍みて來りしを見るもいなしよ清五郎の篋の上に乘られた彼の罪人の面を詠め身震なして行過けるが思ひ返りて立留り熟々考へ見る處姿形ちの替れ共昨年暗日根柢も於て一命をさへ助られたる宮本様も面体の能

も似られた人あると思ひて見れば何と無く胸騒ぎして止まざる耳も今朝結立の髪ある上元結の切もれを愈々以て打驚き扱こそ今の疑ひ無き宮本様よて有る故一度あらせ二度迄も不思議を見せて神々の知らせ給はる者なる何よも致せ姓名を聞糺さんと脚ふ折しも通り掛りも半番体の人を見るより懇切に其名を聞け登壇らん左門之助は相違なく其事柄を聞か否三保松の仰天し宮本様は限りて人を助けの爲る共僅に金も眼の眩み居酒渡世の者位を殺せやうある人よ非ず是よ就ての必しも深き仔細のある事よて無失に陥り給ひしなるべし猶豫のあらじと引返し玉手山の家よと来り案内もせせ馳入れば此時岩戸川も来合して二人侶俱打連立是より場所へ行んとする身支度あして居たりし兄弟子三保松尋常あらぬ見相よて飛込来し打驚き頭を見れば乱髪もえ喧嘩よても爲れかど右左より問けるは清五郎の頭を打振お主等二人よ問ふ事あり一端命を救はれたる大恩人の萬一よも無失の爲よ一命を棄給はんと知るあら其時二個の如何致すや返答次第に火急の大事事聞ざる事あると思ひも寄らぬ一言よ玉手山に岩戸川二人諸共進み寄り如何ある事の知らぬ共命を助けし恩人の無失の爲よ一命も危ふき事を知る上は我身を棄てて舊恩の報る心の非せんば杯か人間と言れんや又何故と問はるしと怪む体を見るよりも慥よ夫ある心底から一大事を咄さんと左門之助の事柄を詞急敷物語り且又途中の事共を洩なく二個よ打明せば聞度毎よ仰天し我々斯て無事なるも宮本様のお蔭なり其恩報じの今日中よ力を合せて獄舎を破りお救ひ申出ん一人の追手を防ぐ可し二人の生の有る限り替るく脊よ負て石州津和野は遁れん如何せばやと力士の三個最早一生懸命よて助る工夫を相談せし一端半を破れば迎お上の人數よ取圍まれ事能はざる其時の只犬死を爲すのみなれば外に手術凡無き者かど心を碎いて居まりける

第十五回

力士兼商と稱りて宮本を冤罪を訴ふ
名吏訴へを容て名士を救んと決む

御殿よ曰く情の人の爲あらずと又宜るる哉斯て力士は三個の敵敵なしても救はんと思ふ心を
打連立忠兵衛様は相談せし宜き工夫の有るも知れ玉手山よ岩戸川お主等如何思ふやと
問はれて二個も横手を拍少しも疾くと云ふ否力士の者い馳出し油屋方の勝手より案内もせせ
奥へと入ぬ此日忠兵衛の油頭の喜兵衛を敵手よ茶の間よ於て圍基の勝負を候み居よ斯と見る
より基の手を留め今日ハ慥よ初日と聞し今頃揃つて来られし如何ある用の出来せしや遠慮
よ及ばぬ用向を咄し聞いて下されと日頃愛顧の力士の事もある心隔てて問ひければ三保松の進み
出差當りての一大事相談を願はん爲打揃つて参上せり旦那様にもお忘れあるまじ昨年暗日根
額よ於て貴君様とも九人の者の山賊の爲よ殺さるべきとお助け有りし宮本様と咄しも半よ至ら
ぬを忠兵衛之を押留め其咄しハ爲給ふ今よ聞さへ恐怖と身震ひ爲して又云ふや斯して春
を向へしも宮本様の蔭もえ毎朝私ハ武運を神に祈りて居る程おれハ片時あり共忘れはせせ
と咄すを聞より力士の三人一口同音よ詞を揃へ左門之助の身の上を詳細忠兵衛よ物語れハ夢の
と計りよ仰天一齋く胸を漸く鎮め能も相談下されたり宮本様は限りて人殺し杯致されて賊を
倒く方ならせ全く無失よ相違なし恩報じハ此時おれハ金よてお救ひ申せらるら我身代を償
しては是非ともお助け申さねば私ハ固り力士ハ衆も身の一部立ぬ者あり幸ひ南の町彦奉行彦
尾様ともお入懇おれハ逐一言上致せし上再吟味とお願ひ申さん少しも遅々とする處よ非と身支
度迎も手疾くなし三個ハ力士も同道し打連立て四人の者の彦尾の邸宅へ到りし中の口より案

(六) 内を請へば用人福田新七の何心なく立出来り斯と見るより詰所へ通し夫より忠兵衛并力士の何の至急の願ひよて参上せりと云上し吉左衛門の之を聞如何ある願ひの趣きあるや果も此へ通せし對面せんと許しの詞は新七再度詰所へ來り待設けたる忠兵衛等主人の詞を告與へ通せし願ひの事彦尾の出で面會し何やら火急の願ひの由力士の者等も同道して興行杯の事あるの疾くせよと尋ねを受忠兵衛聊か進み出今日力士を召連て願ひ出し余の儀は座をく豫てお聞入もせし私共が去年の事大和巡りの返り路暗日根嶺の絶頂にて一命をさへ賊徒の爲に己は失ふ處を石州津和野の浪士ある宮本左門之助と云ふ方九人の者迄助けられ其大恩の片時も忘れを罷在るか今度不圖承る佛庄兵衛夫婦を殺し金銀衣服を奪ひし賊とて今日溜りのお牢屋へ送られたる事の事なれ共是は全く無失の罪と思ひ込たる願ひよ何卒宮本様の助るやう再吟味を願ひ度此儀を濟給はる上の忠兵衛の身代取償なる逆も毛頭恨み奉つらせと陳る側より清五郎も途中に於て不思議を覺へ且又出所姓名を聞糺しる事迄も具に官上致されば吉左衛門の冷笑如何なる事と存知の外容易ならざる願ひあり如何にも昨年其方等の救助者よて初め善人と呼れし人も後悪人であるも有り初め悪人て有り逆も悔悟も及んで善人と忽ち變る者もあり今其方等を助たる左門之助と云ふ人も汝が九人の者等の賊手は習し其時の義勇を以て救ひし者あり庄兵衛夫婦を殺せし時の此悪心も變せしならん左とれば如何程其方等の大恩人て有る逆も今人殺しの盜賊ならんや拙者の長らく病氣の爲は出勤もせ居るあれと曾て様子も知らざれ共今日送りよりしとあれば白状をして服罪し最早吟味も相濟て爪印口書の後ならねば溜り此獄舎へ下しおせぬあり夫を笑ぞや無失と見做し再吟味なぞ願ひ出るの上を恐

れぬ心得方余の者あれば直様よ答を付べきなれ共其方達の事のえ聞捨よして取する願はけと満面よ憤りを合て云放され吠と平伏しるる恐るく忠兵衛の再度漸く頭を擡げ仰渡るよお詞へ押返しての恐れ多けれと今一通お聞下され善人あり共悪人と變り悪心よても悔悟の後又善心とある者ありとか其論し去る事ながら宮本氏に限りての變心さざる方方あら其る証據の其砌り當座のお禮と百兩を差出せ共手も取れと其後路用の乏く在れば私方へお出の善あり居所も詳細や上儘よ存知あるべきよ私共へのお出もなく僅の計りの金子の爲よ老の夫婦を殺し杯と決して座をさき事あれば此等の事を幾重も察察を成下され吟味直しを願ひ升ると陳る詞も口録りて浮ぶ涙を拭拭ひや出るを聞よりも吉左衛門の大ひは怒り假令如何ほど其方共の罪人宮本を信する共人を殺せし覺へのあれば奉行原田の吟味を受罪し服せし者ならせや犯せし罪科のあらせんば拷問の爲よ死する共服罪すべき罪科なし左とれば何ぞ無失と爲さんよしや無失と看做とも一端奉行たるべき者吟味をしるる事件を再度拙者の調ぶる上の夫ある罪人の棄置て原田の非をば擧ねばらせ又其上は宮本の犯せし罪科のある時原田へ對して相濟せ其言譯よ其しの切腹せねば相成せ斯る事をも辨へて再度詞を返せと云ふ其甚だ不堪の心底なり平常の入懇よ甘んじて我を侮る願ひと見へより疾く立去れば用捨をせせ息巻猛く罵罵され忠兵衛を初め力士の者返す詞もあきのみ最早助る手段もあく頭を垂て蹲まり黙然として在りければ吉左衛門のまこと怒り退ぞかきやと荒らかよ渡され四人の者洞然其場を立んと爲す此時後の襖を開き走り出りの細君と娘菊枝の二個よて右左より取絶るを吉左衛門の宿と睨み婦女如き此席へ罷り出へき所よ非を退き居よと戒むれど聊の慮せを側よ寄り吟腹立の去る事ながら妾はし上るとは先一廻りお聞下され最前より忠兵衛の願ひの趣き聞よ

付予上ねばらざる事あり尊君のお忘れあられし前一年の事よ一て江戸お邸にお勤め申す
 正月中旬の事なるが妻の娘と諸共福田新七を供連龜戸村なる天神へ参詣致せし其返るさ中
 食のため立寄し其家よ於て不圖も若主の入來り娘の酌を取せんと手込ますべき其折柄數多の者
 を懲た上お救ひ有し其方の宮本左門之助と申聞られ諸國を廻身なるが故に宿所と云は定ると緩
 々お禮の詞も聞れずお別れせし事共を返りし後、妻のお咄上ある時居所さへ分らば尋て往厚
 く謝禮を爲すべき者を此後對面致しもせば是非恩返しを爲ねばらざと屢仰せられしや娘よ
 和女も忘はせまじと母の詞も引續き又其時の事共を洩なく父も物語れば妻の良夫の側も寄り今
 忠兵衛等が願ひ出しも其宮本氏と相違ない妻や娘耳も新七逆其時供も召連ありなれば能
 くお顔さへ存知あるべし旦那様よ此事を最早お忘遊せし其頃仰せしお詞の今も違は存ぞ
 るから何卒吟味下れよ妻や娘も願ひ升ると過し事共物語られ吉左衛門の打驚き如何にも先年
 江戸表よ在勤な一て在る砌り妻や娘も大難を救ひ呉たる武士の宮本左門之助と聞及び一又忠
 兵衛共九人の者を殘らせ助けし人となれば誠は珍敷名士あり左れば今回の一條も冤罪の事
 かも圖り難し某も出勤致して居れば假令係りて非共又宜き工夫も有りつる者を知らせし過し
 事といへば妻や娘の大恩を此儘見棄て居らるべき此より出仕の届を出し罪此有無を取糺さん忠
 兵衛并よ力士の者願ひの趣き聞届りを吉左衛門の詞を聞四人等く飛立計り嬉し涙も咽びける此
 時田坂彌十郎の至急も拜顔致し度事柄ありて參上せりと新七を以て入られ吉左衛門の居室へ
 と通し何やら急用の赴きあるか貴所も承知ある如く長らく病氣の身を以て引籠りて居られ
 と容身もらざる出願も今日之より出勤なす實の拙者の所存なりしを就て貴殿も早速なすら
 ぬやと事ごと有り此處難利此極りし庄兵衛夫婦を殺せし賊の様子に定めし承知なるべし

左衛門の身に取ても棄置難き一條ありて此儀をお尋ねすなりと聞より彌十郎も過より某
 迎も余の儀よ非石州浪士の宮本なる者人を殺せし賊なりと原田氏に召捕れ吟味せらるる様
 子と云ふの日々手荒き拷問のみよて如何にも不審の事共多く小生再度諷諫も爲つれと曾て聞入
 り給はぬ耳の吟味も付て越度の有れば切腹致す迄の事必口外無用なりと奉行たるべき方よも似合
 ぬ餘りの事と存せれ共下役の身分已むを得せ亦宮本と申する浪士の天晴優れし人物にて拙者の
 眼で見る時の中々賊など働くべき決して者共思はぬより實に獄内へ忍び行云々斯々謀ひて一時
 の命を救はん爲假し服罪致させ置し唯此上へ全くの賊を召捕得ざるよ於ての惜き名士を失ふ
 故貴君よ此等を打明し宜しき指揮も與らんと參上せし事なりと田坂が始終の物語りよ吉
 左衛門の雀躍し其元々の宮本の命の疾く失ふ可きも能く斯まで計らはれたり我等よ於ても
 棄置難き其事柄とすすの何様云々と江戸在勤の其砌り妻や娘の救はれたる事且亦昨年忠
 兵衛等の助けられたる始末を逐一此も物語れば彌十郎の聞毎も唯々感歎せる耳なり此時彦尾
 吉左衛門の何やら田坂も囁き示し忠兵衛等も引取て夫より直様出勤し左門之助の事柄を詳細書
 而も相認め再吟味をば願ひ出し加賀家の國老長甲斐の願書を讀て驚おれ直ち彦尾を招き
 寄られ尙ほ一伍一什を糺し且の見込に至る迄具承知せられしよりねがひの趣き聞届再吟味
 をば許されたり

第十六回

彦尾の深智黑白邪正を裁斷と
 宮本時運を得て不圖復讐も及ぶ

亦既彦尾吉左衛門の原田軍次兵衛よ書を送り庄兵衛夫婦を殺したる左門之助の身分も付外も調
 ぶる事の有るより最早吟味済められ共再度拙者の糺問なれば此段も含置れ度と念の爲る書状

を見て原田の何やら合點の行す彦尾は是迄病ひの爲に出勤もせせ在たる者俄然も出仕を爲と
耳の亦宮本の事よ付吟味に及ぶ趣むきあるの如何ある事を糺すよや心憎しと思へ共留る權威も
無き儘も知らず顔して打棄置り此方の彦尾吉左衛門彌十郎より密のよす越れる事も有るよぞ不
淨藏に自ら到り取上置し宮本の刀の勿論脇差をも改めばやと立入て夫々調べ見る迎も左門之助
の雨刀の會て見へざる處より彌十郎をも呼寄せて俱に詮議を爲したれ共土藏の戸前も替りも無
く誰迎外も取扱ふべき者も有ねば外より賊の入りと覺へず察する處有る品の尋常あらぬ名作
あるの但し持への金銀なるよ必ず私慾を起せし者か前も盗まし者ならんと是等の事を田坂も托
し吉左衛門の工夫を旋し何れにも庄兵衛を殺せし者の出されば左門之助の一命を助る事の能は
ぬ耳か我一分も相立す兎も角過し事あるら殺害されし其際の様子を逐一糺しなば宜き手掛りを
得るやも知れれと小清水村の名主の勿論庄兵衛方の最寄も住を甲乙をも呼出し皆打揃つて出
る折柄吉左衛門の席も着名主庄兵衛も打向ひ昨年十一月の初の方居酒渡世の庄兵衛夫婦が盜賊
のため殺害されし其場の様子を存知あるべし如何ある者の所業なるよや心當りも有る事あら
裏み匿させや上よ何なり手係り共なるべき品の取落して有りもせざるや是等の事を糺さん爲
呼出したる者ありと言渡されて面見合せ何れも詞を發する者なし此時左兵衛の頭を擧げ奉行
様も伺ひ升る上兵衛夫婦を殺した賊の直ちよお捕へと成る耳の此ほど吟味も相替て近き内
の所置なるや承知致し升れと尙お調べ渡の事ありて尋ねよも相成しかと恐るく伺ひ
ければ吉左衛門の進み出て如何よも賊を働かし石州浪士宮本ある者原田氏の調へを受けての服
もるあれと未だ明白あらざる故も又々其方共を呼出せりと彦尾は渡しを聞て名主庄兵衛の稍
須臾首傾けて居りしが奉行様のお尋ね思ひ出せし事のあり其節勝手の入口も取落しある財

布の汚塵れば必も賊の所持せし者と私一方も取置たるが其夜の内に盜賊の召捕と成たる儘に
竟其品を差上ねど若し汚用よもあるなら直様取寄さんと言上せし彦尾の悦び其品疾く持
參せよ必も手掛り共なるべき者と命を受けて左兵衛の返り頼ての事よ持參せし財布を夫へ差出せ
ば吉左衛門の手も取上如何ある物や入しと申る品を取らせし散子の二つよ一通の文より外
よ何も無く宛名の戀しき勘様へ汚ぞんじよりと有るのみなれど是屈竟の品ありと此日の殘ら
引取せ其翌日とある否小清水村を始め尙ほ近村の戸籍帳を取寄て自ら逐一改むる勘と云ふ
字を頭よ付る名前も數多ありぬれ共多くは老ハ小兒よして此と看認る者も亦尙ほ繰返して詠
る内庄兵衛夫婦此籍面を不圖見當て改むれば最早除籍の者なれ共前も養子と定めたる勘八と呼
ぶ名前のありし此奴の當時如何なる身分か事よも寄らば此者の所業なるやも圖られど又い
名主を初めとして同村の者を呼出し庄兵衛の養子勘八と云るの如何なる譯も除籍と成し且
又當時の何れも居るや其職業のやとよ及ばせ平常の行ひに至る迄存知て居らば誰よも委敷言
上致とべし屹度褒美を取せんと申渡され一同の村の族の進も出異口同音も陳るや唯今も尋ね
の勘八事の一端庄兵衛の養子とせし放蕩無頼の者よして色と酒とよ身を持崩し其上あらざ
法度の博奕のみを心掛一向意見も聞さる故庄兵衛夫婦も困り果竟勘當致してより最早六七年
も過ぎたるが昨年の頃の折々よ見掛し事も汚座り升れと當時の何國も居り升るや其儀の存知さ
とと始終の事を言上せしよ吉左衛門の大ひも悦び一同の者へ褒美を取せ退散せしめて直様彌
十郎を呼招ぎ手掛りを得し事共を此よ逐一物語れば田坂も於ても限りなく悦喜の眉を開きけり
儲又原田軍次兵衛の日ならず宮本の所刑を爲んと源吾兵衛へも相通じ其心組よて在けるよ吉左
衛門の何やら調ぶる事の有るやよて書狀を贈りし事さへあれは處刑を急ぐ譯も亦あらざ

様子を探らむれば左門之助を吟味もせむ小清水村の者共を嚴重調ふる事を聞忍ち大ひ憤り一端我等の吟味を遂罪に服し宮本あるも亦庄兵衛を殺したる賊を探索致せるら左門之助を無失と見做や外吟味の事あらば打棄置て宜けれ共夫の斯と明しむせむ心憎き致し方なり其儀ならば捨置難しと吉左衛門の出席の法庭は原田の推参なし面は怒色を現しむら一禮畢つて陳るやう拙者の調へ宮本を貴殿の無失と爲るる左もあき時何故小清水村を調べられしや其意を得ざる貴殿の心底此儀をお尋やさん爲め推参せりと聞よりも吉左衛門の眼は角立這の心得ぬ貴所の一言は服罪した賊にもせよ拙者も於て調ふる事を彼是言るし謂れおし假令如何なる事の有り共貴殿の落度成らざる様取計はん所存なりしと答られたる上からの争か此儀黙て居らんや抑々庄兵衛を殺しぬる賊は宮本と思はるや我等も於ては左門之助の所業ありて存知やさと夫の爲實の凶賊を捕へん爲の探索なるを能も過言をすされたりと聞より原田の愈々怒り現在罪に服したる賊を棄置外に又賊徒は出る謂れおし萬一拙者の調べぬる賊もあらざる其時へ我一分の立されば切腹致して謝しやさん貴殿は於ては宮本の外は盜賊の出さる時何を以て言譯せらるや如何も庄兵衛を殺しぬる寔の賊を捕へぬ時貴所は對して濟さる耳か上へも濟ぬ事なれば割腹致した其上は家名を没収せらるる共曾て後悔仕つらすと之より互ひも双方より書面を以て届出れば長甲斐殿も驚おれ太守へ斯と言上し両町奉行の出願を聞届られ其身も吟味の席へ着れたり此時彦尾吉左衛門の左門之助を呼出し先一通り相調べ軍次兵衛は打向ひ貴殿の最初宮本を召捕れたる其時より拷問のさし掛られたる由且又庄兵衛方は止宿を爲し其事柄をも調べ給はす其場は賊徒の取落せし財布一つの有りぬるを余も存知の存知は是ぞ寔の盜賊の心周章て遣せし品あり珍寶めれよと用箱の中より財布を取らせ軍次兵衛は冷笑ある

品があれは逆外は賊徒は有るといふ必き証據は相成まじとて人を殺害し金銀衣服を奪ひたる左門之助の事なれば己れが身の上を遁れん爲に斯く謀り者かも知れぬ夫を何ぞや其元よの証據と爲して宮本を盜賊ならせとせらるる片腹痛いと痛るよ吉左衛門の大ひ怒り然らば不日其賊を捕へて貴殿の疑ひを必き晴しやすべし逆此日の一同退散せり之より後の片時も疾く寔の賊を召捕んと探索方を差出し百方勘入の行方を偵れ共更も手掛りを得ざるより吉左衛門の工夫を旋し或日數多の罪人を殘らば法庭へ呼出し其方共の内より當時勘入の何國も居るや行方を存知て居る者あらば詳細言上致せし褒美として誰よても罪の輕重を問はせ直ち許し放つべしと言渡されて囚人の互ひも面を見合せ居る熊鷹傳次と云ふ賊が多の中より進み出只今お尋の勘入の居所をす上りもえお奉行様はお情で命を助て下されと尙又前も遣出るを吉左衛門へ聞給ひ其方居所を存知て居るの疾々上るべし命の助取せんと聞て傳次の打悦び其勘入とやそる者の其實私親分にて當時の大聖寺の片傍り柳の晴は居り升と立しよ吉左衛門の直様田坂彌十郎へ捕縛の手當を命せられし又悦びの大方あらと自ら數人の手先を隨へ其地は出張ありたるの忽ち捕へて返られぬれ直ち法庭へ呼出し嚴敷吟味を遂られし初めの内の白狀せされど最早遁れぬ處と悟り如何も昨年霜月の初め庄兵衛方は罷越し金を借んと無心をそれと一向問入ぬ處より是非なく手込に持去んと立掛りし時盜賊と夫婦の者も騒ぎ立られ認められなれば一大事と竟も夫婦を殺害せし逃失たるも相違座座早く早此上り如何様なる嚴刑も處せられ度と逐一白狀致せしよ口書爪印も相濟せ其翌日と相成ければ長甲斐のすよ及ばば軍次兵衛も出席せしよ吉左衛門の勘入を捕縛なしたる手續きより罪に服せし口書を示し貴殿の斯て宮本を盜賊なりと爲給ふか返答如何と問ひ詰られ今更一言半句も無く默然として在りぬる砌

(四十八) 門之助の差料なる詞刀を夫へ持出し又は迎も伊存知あるべし先も不淨穢を改むるよ此二層の見へざるより篤と探偵を遂たる處城下の町へて見當し故も出所の詮議を致せし處全く貴殿の注文よて拵へ直しを致さる由其ものあら口の書ハ斯此通り取置たり是のみあらそ其元よの鈴木源吾兵衛の頼みを受左門之助を亡はんと手荒き拷問をせられしむら老や鈴木ハ先よ一郎と呼び豊後杵築に在る砌り宮本衛守を闘殺るし其後石州津和野に於て宮本勘解由を山中よ鳥銃を以て討果し逐電致して踪跡を隠し當家よ仕へて在る事を漸く尋ねて左門之助ハ叔父と親と此仇敵討んと遙々下りし事を源吾兵衛の疾くも聞知已れし舊惡を掩はん爲の密意を貴殿ハ引受て庄兵衛夫婦を殺したる賊ハ陥りて亡はんと深く謀り給ひ一あらん已よ鈴木ハ元老のお指揮を受けて某し疾くよ縛め置る耳の嚴重糾問を遂る處遠れ難きを渠も悟りて一伍一什の白狀せり斯迄露顯よ及びし上の何を以て言譯あるや返答あれと云ふ折柄上座よ於て傍聴ありし長甲斐殿よ左右へ下知な一原田の小刀を取上よと大聲を發し給ふを相圖ふ顯れ出たる若士ハ軍次兵衛を取圍めば早是迄と立上り帶たる一刀取より疾く彦尾吉左衛門覺悟をせよと大喝叫んで斬て掛れど數人の者よ遮られ其場に於て擒と成し奉行るるべき身を以て重を不埒の所棄るり迎即刻切腹を申付られ家名の没収せられたり又た凶賊の勘入ハ一端父母となり一庄兵衛夫婦を殺害し金錢衣類を奪ひし科にて引廻の上磔けの刑よ處せられ亦熊鷹の傳次よ於てハ一時大罪を免されて所拂ひと成るるの直様惡事を働きしよ日數十日を出せして再度捕縛とある耳は是又後日嚴刑よ行はる儲宮本ハ此より先よ吉左衛門の計ひよて數人の名醫ハ打寄りて内科外科共醫術を施し治療を加へし事なれば三月上旬に至り一頃ハ再度壯健の身と相成氣力も本腹致せしよ日柄も選て城外の廣場よ高く矢來を設け警護の足輕五十八人六尺棒を取て非常を戒め復讐の用意を爲しめり左

門之助ハ早朝より身支度嚴重よ打扮て時刻の遅と待受より鈴木源吾兵衛も臆とる体無く大刀腰よ横もへて徐々現れ出るる此日検査として彦尾吉左衛門並よ田坂彌十郎其他同心よ至る迄列を正して居並びたり且又油屋忠兵衛を始め力士三個へも特別を以て復讐の傍觀を許されたり此等の事を聞傳へ近郷近在の人々の前日より群集り矢來の外ハ山を爲し錐を立べき地も非老片唾を飲て待受たり漸く時刻の來りしに相圖の太鼓を打鳴せば左右よりして現れ出し左門之助ハ鈴木に向ひ父と叔父との仇敵最早通れぬ汝ちの一命疾く尋常の勝負をせよと大音聲よ呼びければ源吾兵衛ハ冷笑ひ敵呼はり片腹痛し先や來れと抜放ち身構へ爲せば宮本も争る猶豫致すべき名刀すらりと抜より早く斬て掛れば鈴木よ於ても肺を變じて受流し之より互ひの秘術を盡し一上一下と火花を散し七離七合戦ひし其當代に二と下らぬ左門之助ハ精妙なる武術よ笑ぞ敵すべき竟よ其場へ斬倒さる悶る所を宮本ハ透さき上よ乗掛り留めの刀を刺貫けり斯と見るより吉左衛門ハ



其場へ斬倒さる悶る所を宮本ハ透さき上よ乗掛り留めの刀を刺貫けり斯と見るより吉左衛門ハ

(六十八) 扇子を開きて差招き又見物の人々の咄と計り、門をあけ是又萬歳を祝せしなるべし

第十七回

彦尾の郎に夫婦兄妹奇遇及ぶ
宮本八重梅を援て塚原左源太を殺す

虎穴に入道しての虎を獲と危急な耐せんば憂を除き難しと亦宜なる哉斯て宮本左門之助の一旦死地は陥りたれ共竟の晴天白日の身と相成數年の困苦も今昔の夢と變じ彦尾の勿論田坂等の深き情も感歎し再生の恩を茲に謝し亦吉左衛門の今回の吟味も名士を救ひし賞として百石の加増あり彌十郎も夙に宮本の無失を悟り非常の勤功あるを以て奉行原田の後任を命せられ忠兵衛並に力士の者への夫々賞與のお詞あり亦左門之助を召出され新規に指南番も召抱へんと展仰せ出されけるも未だ志願の事あり逆固く辞退し及びし故然らば緩々逗留せよと賄ひ方を附させられ彦長屋をも貸下されし宮本の深く厚意を謝し尙も氣力を養ひ居り或日彦尾の邸宅より招きの書狀が到来せし何事あるかと衣服を改め罷出し彌十郎も席に在り一間隔てし次此間より油屋忠兵衛を初めとして力士三人の並びて居り吉左衛門の左門之助も四人の者を紹介暗日根嶺の事共を具し語りて俱に謝し頓ての事其席へ山海の珍味美を盡し酒宴を茲に設けし其酣に及びし頃妻と娘を呼出し宮本氏へ某より今日改めて妻子が受たる再生の恩を報るあり余もお忘れの有るまじと思ひ寄らざる詞を聞と不審なながらも宮本の一禮爲て熱々と二個の面を詠むれば先年江都に在る砌り龜戸村の天満宮へ參詣致せし返り路危難を救ひし婦人あるもそ此はと計り打驚きますく不審の体あるも吉左衛門の進み寄り一伍一什を打明せば妻の濱野娘菊枝も進み出替るく宮本へ深く禮を陳るを以て漸く不審の晴たれと先より自ら助なる又其人々の手を以て自分の危難を救れし如何にも不測の事ありと感歎の外あらざりける之れより

尙ほも打寄て左門之助を饗應ける酒宴の席も開けし折柄吉左衛門の又宮本は打向ひ貴君も愛度本懐を達せられたる上ければお渡ししと彦人あり受取れよと言ながら妻も何やら付れば程無く夫へ連出し彦尾の娘も劣らざる最婢妍ある美女あるも合點行すと宮本の夫なる婦人の面を見れば其身の豊後在る砌り妻と定めし八重梅あれば這い開き如何に夢なるか餘りの事と不審暫時詞も無かりしに實も尤と知れけり吉左衛門宮本の間近く進みて微笑つ其不審の去る事あきら先づ某しは是迄の始終を貴君へお咄しゆさん拙者が昨年秋の末公用し付て新潟へ出役致せし返り路惡漢共取圍れ難儀せられて在れ其場を救ひて連歸りお世話を致し置たる處此ほど常澤中の人々の妻も呉よと絶へすの言込夫も長縁ならば兎も角と八重梅との尋し處津和野藩士へ嫁したる身も未だ婚禮の爲に他家へ嫁く身も非せと探正しき彦心底拙者も感服致せし貴君も津和野の藩士も若しも貴名も彦存知あるかと不圖お尋しゆせし夫こそ良人と定めし人とお咄し有て拙者も驚き斯も奇遇の不測ある共其元の今回の事件并に敵を撃れし事迄大略お咄しゆせし八重梅どのも夢あるかと喜ばれしもお察しゆす彦遠慮あるも八重梅どの疾く彦挨拶をせられよと自ら立て袖を取り左門之助の傍らに座せしめられて今更に嬉しき哀しき恥しき先立者の涙も傍の見る目も打忘れ唯泣伏て居りしを漸く有て頭を擧げ貴君もお別れしゆせし後父將監の閨の夜も人手に掛りて果敢なき彦最期其傍らに遺して有りし紙入れ中よの塚原左源太と記せし名刺の有るを以て是ぞ敵と見認し故夫より様子を探りて處其前父の傳出の時出先よ於て兵法の議論を以て塚原を大ひよ戒め給ひし事の有りしと後よて聞出し夫を遣恨し父上を殺せし者と解りし故母上様と諸共貴君のお側へ參らんと手藝を以て彦様子をお索ね申上たれば勘解由様も人手に掛り彦最期ありし耳もらき貴君も已に仇討の願ひを上げてお國

(七十八)

(八十八) を立退今は何國に在らずやれざる由の報知を得て又驚きは爲たされど斯て有るべき事ならねば心細くも當も無く諸國を巡り仇人を索る旅中母様の美濃地に於て持病發り竟其地で歿去其時妾の哀しさ俱に死さんと覺期を爲す斯ての後にて父母の菩提を吊ふ人さへ無き夫を思へば死もならぬ處の者に諫められ涙あふらよ立出て其處此處と無く呻吟うち惡漢共の手を捕れ新潟とやら云ふ處へ連て來られて遊女に賣渡さるる其折柄縋の透を伺ひて遁れ出し路さへ知れぬ亦も後より追掛られ再度手込ありし折彦尾様は助られ厚き世話を受るがら竟今日まで居りましむと始終を明して宮本の片邊に伏て八重梅の涙を咽ぶぞ道理なり左門之助の夢なる如く八年目にて不圖も不測の對面を致せし故歡ぶ事引替て師あり舅の將監の横死の事に付敵の塚原左源太と詳細聞て嚙を爲し其奴は先年某の筑後久留米に在る砌り塚原方と逗留中刀の中身を偷換られ知らぬ出立致せし後旅宿に於て心附取て返せば左源太の同國足代山へ罷越門弟共を打集ひ野試合を催し有る由を留守居の者より承はり其場は踏込多くの弟子等を斬拂ひ刀は直ち取返せし塚原のみ手も負さず取逃せしを今以て遺憾なりと思ひ居たるも又も其奴の手は掛り田丸殿への最期ありて最早此世に在さぬと思はせ兩眼を涙を浮べ悲歎を咽ぶの傍らよて始終の様子を聞居たる彌十郎の進み出某し最前より各位方の物語られぬを聞ふ付お咄やそ事の有り何を隠さん我等の實父の元和九年の秋の頃武術修行の爲とて當國金澤に逗留中我家へ屢々出入をせられ竟に夫とあらしむ二歳余り過る内設られし某しよて悦び給ふ程もなく母の産後の日立の悪く三十日を過ぬ内歿去れぬ趣きあるが當時同僚の甲乙の父の武道は優しを妬み讒言爲とも屢なるも後日の愛を遺れん爲赤銅作りの脇差へ書一通を紀念に殘し父の家出を爲れし由我等の祖母は養はれ稍人心を覺へし時金五十兩を書狀を添見馴ぬ旅人の届

て行ふ不測なごらも開封し書面の体を見る所先は家出をせられぬる我父上の書狀也當時何れに在るやら様子を聞くと馳出しの届に來る旅人の最早陰さへ見へざれば後悔めど其甲斐なく尙ほ文体を讀見るも當時の田丸將監と名乗未だ住居の定めぬ共九州地方の先祖より住居致せし地なるを以て身を落付る心得云々且亦金子の某へ學資の爲に差贈ると厚き情の書面をれば我等の愈々慕はしく成人の後是非共父子の名乗も爲ん者と娛み居たる甲斐もかく勤る身分と相成ての他出も自由からざる儘打忘しよあらぬ其竟今日迄過たる所不圖父の横死を聞日頃其志願も上は絶、落膽致せし拙者の胸中お察しあれと眼を涙浮べあふらよ八重梅の間近く進みて和女こそ腹の替りと我等の妹永の星霜父上のお側居りし者なれば我身の事も折々の咄よても有りしから物語られよと名乗られて亦も吃驚仰天し須臾の余りの不測さよ詞も出す八重梅の顔のみ見詰て居たりしに忽ち下座へ飛下り如何なる折々父上よ未だ壯年の事なるが加州に於て或家の入夫となりし程もなく一人の男子を擧げの妻ある者産後歿し面白らと在る砌り同僚中も不良者あり根もなき事を言立て讒言爲とを知るより後日の難を遺れんため家出を致して後一度窃に書狀を贈り後絶へて音信もせざりしが定めて成長せしむらん其時紀念の印にと殘し置たる脇差の其拵への赤銅作り目貫の金の狂ひ獅子中身の備前長光成の最早當時の平常の差料にして居るあらんとお咄ありし屢々なれと妾も幼き頃みれば深くも伺ひ置もせし唯今お咄する事のみ覺居ましむ其様あら貴君の妾の爲に兄上様で在るお無媚と平伏て嬉し涙を催しける此時彌十郎の次の室より父の紀念手放さぬ小刀を持來り尙ほ疑れなき爲に宮本氏も諸共改め下されと差出されて八重梅と左門之助の手を取上中身の更なり拵へを改め見れば這如何よ今八重梅のやせし如く少とも違ぬ脇差なるも互ひよ目前の奇遇を怪み悦喜の眉を

(十九) 開く折何思ひけん彌十郎の横手を確と拍鳴し敵塚原左源太の日數十日を出して急度討取す
べし、歡れよと聞より左門之助八重梅の開如何ある事よて敵の所在を存知ある疾々仰
聞されよと右左より詰寄る彌十郎の莞爾と打笑實の先般大聖寺へ近き所まで出張し兇賊劫八
を召捕たる其歸り路に拙者師匠玉野左近とやとる者途中面會致せし時塚原左源太猛虎と
て随分武術を心得たる當時浪士の身の上なるの仕官の望あるやよて尋ね越たる事あり何へか
りと世話して師の依頼も己むを得せ心急き中なれど其居所をさへ聞置し察する所亡父
の靈魂自と導き給ひ一あらんと物語られて二個の悦び彌十郎討取べき手術を茲に談合せん諸
亦彦尾吉左衛門の思ひも寄らんと我家に於て夫婦兄妹の奇遇も驚き默然として居りし今亦塚
原左源太の所在も直ちよ知ると云ひ此神佛の力を以て引合されしよあらば斯る不測の有る
まじと亦改めて酒宴を設け三個を茲に祝しけり其翌日は相成と彌十郎の宮本此宿所に來りて對
面し我等も實父の仇みれ共父の家出をせられ一人故今更敵と名乗もやられ且又承知ある如
く君へ仕る身の上あれば刃を取て向ふも難し何卒貴殿は武勇を以て妹八重梅に力を添首尾能敵
を討しめられよと萬事残る方もなく世話を致して塚原の所在を委細示しよ左門之助と八重梅
の天へも登る心地して其悦びの大方なら直様身仕度を充分な能登國小田矢をさして乗込け
る諸亦田坂彌十郎の吉左衛門の計ひよて上への病氣保養のゆめ湯治の向は披露を致し後れ走に
駆付來し未だ宮本の仇討せ敵の様子を伺ひ居れば左源太を欺く手術を示し塚原方よ趣き
て其身の師も玉野左近の書状を出し仕官のお世話を致さん爲め推參せりと言込ければ直ちよ
面會を爲す耳か大ひよ喜悅の体みれば仕濟たりと詞を工み欺き出して同道一人家を放れし松
並木よ差掛りも其折柄待設けたる宮本の八重梅諸共走り出田丸將監の仇敵余も某一を忘れも

せまじ筑後久留米に在る礪り足代山にて汝等のみ取逃したる宮本なり此なる者ハ田丸の娘八重
梅よて俱不戴天の親仇ありいと尋常に勝負をせよと右左りら詰寄ければ今ハ通ぬ左源太
片傍ありし彌十郎も俱以前の事を脱連出さん其爲よ玉野此書簡を偽りて此まで欺き出せ
し者あり最早通れぬ汝等の一命立合やと罵られ囁を爲せ其陰なく早是迄と一刀を抜より早く
斬掛來るよ左門之助ハ八重梅よ力を添へて立向せ竟も塚原を討しめたり夫より彦尾吉左衛門ハ
首尾能復讐の濟しを悦び萬事自ら引受て檢視其他の事をも濟せ皆萬歳を祝しける又審中の人々
ハ一度ならせ二度迄も宮本の仇讐を爲しよ驚き或ハ武勇の優に感じ是非共當家よ仕へられよ
と勤る者の多けれ共一端は辞退を致せしのみか未だ本國ハ母親もあり舊主の恩の樂難き事を
中陳て固く辞し尙ほ二月餘り逗留せしよ斯て有るべき事ならねば互ひよ別れを惜みつよ亦の費
面を約し此年秋の初め方八重梅ハ田坂彌十郎よりも利たる事を差添て石州へ送らしめ左門之助
ハ歸路よ立寄る所あるを以て後より金澤を發足しぬれば彦尾田坂も國界まで見送り油屋忠兵衛
力士の者ハ尙ほ數十里を送り出し其別るよ陸み饑餓あり逆許多の品々を贈り亦心利ある若
者二人を本國まで差添んとや出るも宮本の堅く之を謝絶し月日を重ねて播州姫路よ到着し國
老黒島左膳よ面會して先年の厚意を深く謝し其より四國よ渡りて土州足摺山よ到り小松翁よ對
面し北國よ於て大難を逃れし事共より本懐を遂亦翁の先見よ違はせ田村將監の仇敵再度塚原左
源太を討し事より田坂彌十郎と八重梅の兄妹ありしを物語り其他姫路の天守よ於て妖狐を退治
亦與羽廻歴の一伍一什を洩あく茲に物語れば翁よ於ても屢々奇異の想ひを爲して只管左門之
助ハ高連あるを祝し竟よ四五日逗留致して暇を請ひ石州津和野へ發足致しぬ亦獵人大作ハ初め
足輕かりしも非常の勤功あるを以て立身し山邊大之進と雖も宮本よ別れし後上州高崎よ於て仇

(二十九)を討つ此等の本編に關するべき履歴ならねば略と且亦豫州松山の在高波村の農夫宇右衛門此粹
 宇作ある者左門之助より恵れたる金十兩を資本とて言聞られし教訓を守り孝義怠りなきを
 以て十九才の時再度同村の名主と相成此より當家榮へしといふ亦宮本の津和野へ返り光蓮寺へ
 趣き八年日よて母子恙のみき對面及び八重梅を改めて妻となし國侯に仕へ精勤を盡し愛度星
 霜を送る内二人の男子を擧しより次男を以て田丸の家名を嗣さしめ一家殊に親睦して子々孫々

荒川藏版

日本橋區馬喰町二丁目九番地
 翻刻發行者 荒川藤兵衛

印刷者 同區柳原川岸第二號地
 三好守雄

發行所 同區馬喰町二丁目九番地
 錦耕堂

明治三十四年三月十七日印刷發行

(二十九) を討し此等の本編に關るべき履歴ならねば略と且亦豫州松山の在高波村の農夫宇右衛門北梓
 字作ある者、左門之助より恵れたる金十兩を資本とかし言聞られし教訓を守り孝義忘りあきを
 以て十九才の時再度同村の名主と相成此より當家榮へしといふ亦宮本の津和野へ返り光蓮寺へ
 趣き八年目て母子慈みあき對面及び八重梅を改めて妻となし國侯に仕へ精勤を盡し愛度星
 霜を送る内二人の男子を擧しより次男を以て田丸の家名を嗣さしめ一家殊に親睦して子々孫々

荒川藏版

日本橋區馬喰町二丁目九番地

翻刻發行者 荒川藤兵衛

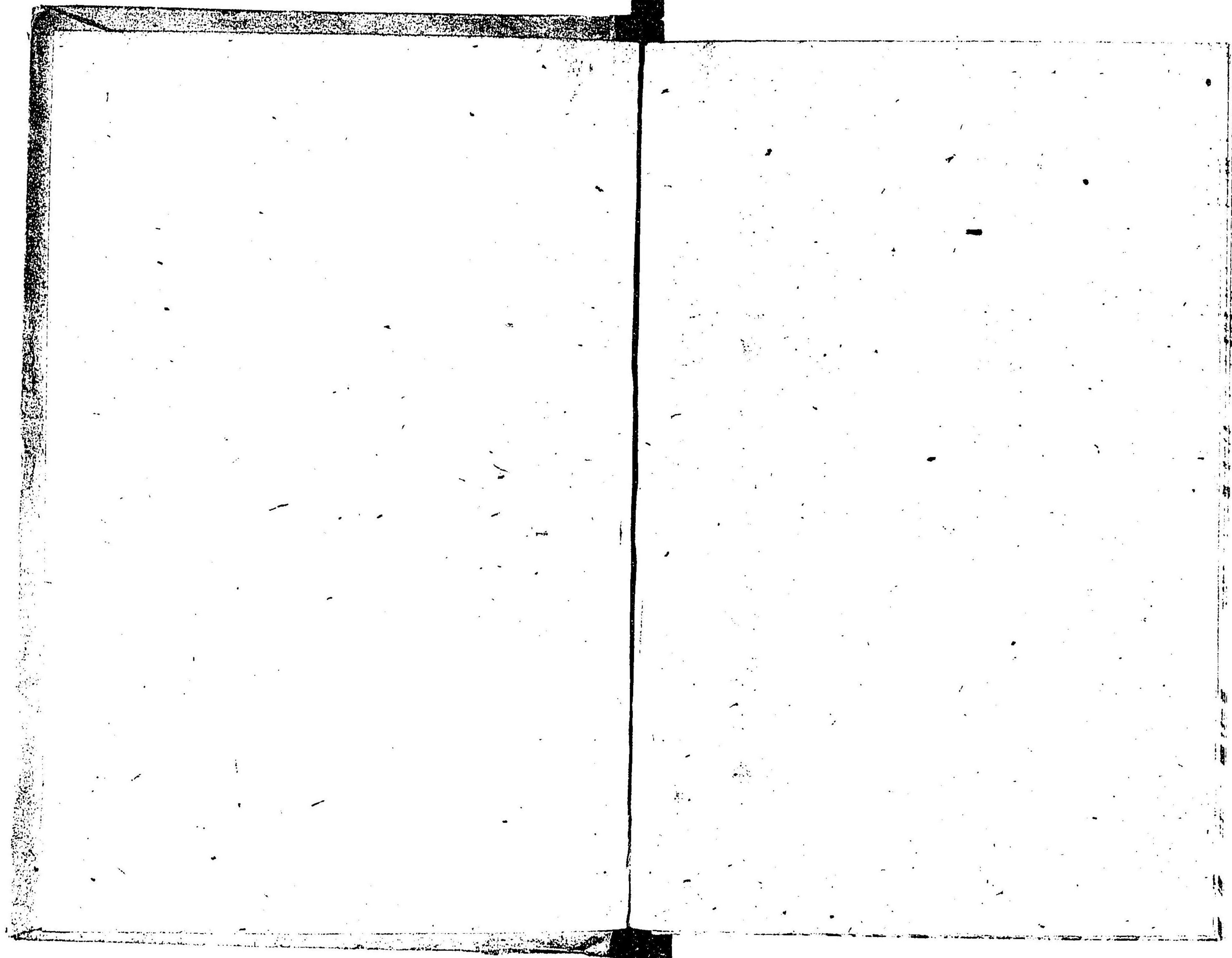
同 區柳原川岸第二號地

印刷者 三好守雄

同 區馬喰町二丁目九番地

發行所 錦耕堂

明治三十九年三月十七日印刷發行



60

特54

376



091415-000-8

特54-376

宮本左門之助武勇伝

錦耕堂

M26

DBN-2322

